

もっといい明日が見えてくる - Letters from Gnoble

Gnoble G-let

グノレット

vol.20

2017年12月発行

Gnoble Teachers' Voice

教務本部長（英語科）秋好三成

英語科 清水誠

グノーブル 卒業生インタビュー

2期生 高田修太さん

7期生 伊藤龍一さん

保護者座談会2017

生徒に対する愛情と、一人ひとりを見る細やかさ。

子どもを任せて間違いなかった。

その思いは今も変わりません。

東京大学トライリングル・プログラム(TLP)

選抜者インタビュー

理科二類2年(開成) 小森優真さん

文科一類1年(鷗友学園女子) 小田麻優子さん

中学受験グノーブルから〈算数〉講師座談会

一番大切なのは授業をしっかり受けること。

算数で得た経験を数学でも活かしてほしい。

英会話グノキッズから

大きく変わる学校英語を踏まえた

「英会話グノキッズ」の英語教育とは…



Nothing in life is to be feared, it is only to be understood.
Now is the time to understand more, so that we may fear less.

人生において、何も恐れるものはなく、理解することだけが必要です。

今や、さらに理解すべきです。そうすれば恐れのお気持ちも薄れます。

マリー・キュリー

Marie Curie (1867年11月7日～1934年7月4日)

ポーランド出身の物理学者・化学者。日本では「キュリー夫人」として有名。放射能元素ポロニウムとラジウムを発見して、1903年に女性初のノーベル物理学賞、その後も研究を重ねて、1911年にはノーベル化学賞を受賞した。



Gnoble GROUP

「知の力」を活かし、たくましく生きる力を育む

Your time is limited, so don't waste it living someone else's life.

(人生は限られている。だから、他人の人生を生きて時間を無駄にしてはいけない。)

これは、2005年に故スティーブ・ジョブズがスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチからの抜粋・意識です。この一節は、未来を築く若者たちへのエールです。同じことが大学受験生にも言えます。人が敷いたレールを歩むのではなく、自分で道を探し、多様な選択肢の中から、自分が進むべき方向を決断する。さらに、決断したことには責任を持って遂行する意志を持たなくてはならない、と。そしてその営みは、大学受験のみならず、大学生活を充実させ、社会に出て自分の人生を切り開く強さにもつながるはずです。今、社会で求められる、自分で考え実行できる「たくましい人材」とは。大学受験グノーブル教務本部長・秋好三成先生からのメッセージとインタビューをご紹介します。

《メッセージ》

「知の力」を活かせる 「レジリエント」な人へ



教務本部長
秋好三成(英語科)

1. レジリエントな力

最近、レジリエンス (resilience) という言葉を聞く機会が多くなっています。私も気に入っている言葉で、授業や説明会、学習オリエンテーションの場で使わせていただいています。元々精神医学や発達心理学の学問領域に由来する言葉ですが、簡単に言うと「逆境に負けない力」、「再起する折れない心」というところでしょうか。

2013年1月にスイスで開催された世界経済フォーラムの年次総会(通称ダボス会議)でも、リーマンショック後の世界情勢にあって、国や企業レベルで、政治、経済、ビ

ジネスのレジリエンスの大切さが話題になりました。以降、教育の分野でもレジリエンスに関する書籍が多くなっているように感じます。

数々のレジリエンス関連の書籍は、教育界やビジネス界に限らず、中高生にも活かせる知識が満載で、授業中に紹介することもあります。レジリエンスは特定の人間が持つスキルではなく、誰もが訓練次第で獲得できるスキルであること、また最近の研究では苦難を乗り越える個人だけの力に留まらず、組織内で人とのつながりを促して、粘り強く相互の信頼関係を高めていく時にも備えているべき技量だとの研究もあるようです。

医師として生涯現役を貫き、2017年7月に105歳で亡くなられた日野原重明先生も、著書『生きていくあなたへ105歳どうしても遺したかった言葉』(幻冬舎)の中で「人間というものは、苦難に遭わなければなかなか目覚めない……(中略)……人間というのは不思議なもので、苦しいとき、逆境のときにこそ自分の根源と出会うことができるのです」と綴っていらっしゃいます。苦難に遭遇した時にこそ、レジリエント (resilient) な力があれば、自分自身に目覚める契機になるということだと思います。

グノーブルを巣立った卒業生からも、レジリエントな力の大切さを学ぶことができます。Gno-let 12号で紹介、14号でインタビュー記事を掲載した、グノーブル7期生の黒木あたるさんと山田智子さんは、東京大学の「FLYプログラム(2013年度から始まった初年次長期自主活動プログラム、Freshers' Leave Year Program)」に選出されました。

黒木さんは、バックバックを背負って世界を廻りました。「有名な中高一貫校から東大に入り、大学生活に忙殺されているうちに就職」となりかねない流れを、自分の意志で止めて、自分と向き合う時間を確保したかったのだそうです。彼の旅はカンボジアでのボランティアから始まります。現地の子どもたちに英語を教えながら、彼自身はクメール語を納得のいくレベルになるまで身につけました。クメール語は将来の役には立たないかもしれませんが、それでも、将来の損得にかかわらず、自分の興味に従って物事に打ち込んだ経験は、黒木さんの自信と生き方の指針になりました。しかし、イタリアでは、油断していてiPhoneを盗まれてしまいます。世間知らずで無防備な自分が旅を続けられるのかという恐れに直面し、次の日は外に出るのが怖くなってしまったそうです。

山田さんは海外での就労体験のためにカナダへと向かいましたが、最初のアルバイト先を見つけるところから苦労は始まります。職に就くためには自己紹介のレジюмеを持って店に飛び込み、英語を使って自己アピールをする必要があります。しかし、数日間は店に入ることすらできませんでした。やっと勇気を出して店の扉を開けても、最初はレジюмеを渡すだけで精一杯。それでも一歩ずつ前進した山田さんはなんとかドーナツ屋さんで働き始めることができました。ところが、その店ではマネージャーにせかされたり、ひどく怒られたりの連続です。親以外の大人に怒られたことなかった山田さんは、仕事場では涙をこらえたものの、部屋ではいっぱい泣いていたそうです。

困難や課題に向き合いながら歩み続けたレジリエントな先輩たちの体験談の続きは、グノーブルのホームページからお読みいただけます。(www.gnable.com/glpdf/g1014.pdf)

*1 "Don't Sweat the Small Stuff and It's All Small Stuff" (by Richard Carlson)

*2 "The Paradox of Choice: Why More Is Less" (by Barry Schwartz)

2. 大切にしたいふたつの「素顔」

私たちは、生徒たちが学校行事や部活に励むことをできるかぎり応援したいと考えています。10代の多感な時期に夢中になって取り組むことで得られる経験は、どんな大金を積んでも買えない値打ちがあるはずです。

私自身は、生徒たちの学校の文化祭、運動会、部活の試合に赴き、グノーブルでは見ることのない生徒たちの別の顔を垣間見る機会を大事にしています。今年も複数の学校を訪問して、懸命に打ち込む姿、歓喜の涙や悔し涙を流す姿など、それぞれに真剣な「素顔」を拝見する貴重な機会を得ました。生徒たちのエネルギーに触れることは私たちにとっては大きな励みにもなりますし、また、生徒たちをさらに応援したいと、授業に際して一層力が入ります。

生徒たちは、学校での一日を終えてからグノーブルに移動してきます。場が変われば、表情も変わります。グノーブルの授業では、生徒たちは歓喜の涙は流しませんが、他ではあまり見せない、知的に目を輝やかせた「素顔」を見せてくれることを私たちは願っています。

与えられる指示を巧みにこなせることも大切だとは思いますが、自分の頭で考えられることこそ、グローバル化の時代で活躍できる力です。グノーブルの環境で、考え、悩み、集中し、ひらめき、感動するといったいろいろな頭の使い方を通して「知の力」を伸ばし、その上で、大学受験を乗り切り、進学後にも意欲的に学んで、考えることを楽しめる人になっていただけることを希望しています。

3. 生徒たちを取り巻く環境

学校での勉強、行事や部活、周りの友だちとの交流、習い事や塾、テレビやSNS。生徒たちは慌ただしく多忙な毎日を送っています。我々人間 (human beings)、とりわけ先進国に生きる私たちは、常に動いて、忙しくしているため、その姿は“human doings”と呼ぶ方が相応しいとした心理学の専門家*1もいました。

また、毎日の生活の中で、私たちは何万回と考え事をしていると言われ、数多くの選択にも迫られています。私たちの周りには膨大な数の選択肢がざらりと並んでいます。日常生活では、食べ物や着る服をはじめ、様々な必需品にも嗜好品にも選択肢がたくさんあり、矢継ぎ早に選択して処理する場面の連続です。人は選択肢がないよりもある方が良いと考えがちですが、選択肢が多くなればなるほど、選択に思い悩み、逆に不自由さを感じるという、いわば「選択のパラドックス*2」現象が生まれていると指摘する研究結果もあります。

そして絶え間なく選択行為が続き、我々はいつの間にか

精神が疲弊して、肉体疲労ならぬ『決断疲労 (decision fatigue)*3』を引き起こしてしまいます。そのため人は豊かさを享受したり、人生で成功する機会をみすみす逃したりしているという研究結果もあります。

だからこそ私たちは、生徒たちがじっくり落ち着いて考えられる、知的に静謐な授業環境を提供することを心掛けています。単なる作業としてこなしていく大量の宿題を与えることはなるべく控えたいと思っています。

テキパキと迅速に選択をして、効率よく作業をこなしている人の姿は、一見すると有能さを示すように見えます。しかしそれは、表層的な深みのない反応にすぎないかもしれません。人生には、落ち着いてじっくり考えることが必要な場面もあります。しかし、考えを深める習慣がないと、それを実行することは難しいのではないのでしょうか。また、複雑に掘り下げられた先人の思考や思想を理解することも、深い考えをたどる練習をしていなければ、なかなか困難なことです。

グノーブルの授業時間は限られてはいますが、時には深く没頭できる題材を用意するように心掛けています。電車の中でも、自分の部屋やお風呂の中、ベッドの上でも考え続ける経験を、生徒たちに重ねてもらえるといいと考えています。

4. 授業内演習こそ生命線

グノーブルに通っている生徒や卒業生から、「グノの授業中に流れている時間は特別」とか、「グノの授業は生き物」といった言葉をいただくことがよくあります。それは、生徒たちに集中してもらえよう工夫が功を奏しているからだ、うれしく受け止めています。

なるべく新鮮な教材をその日にお渡しするというのも工夫のひとつです。今日はどんな問題に出会えるのだろうかという期待が持てれば、授業が始まった瞬間から全員の目がさっと教材に向かい、教室全体の空気が一瞬にして引き締まります。生徒たちが最初に演習した答えは、私たちがその場で添削をして返却します。その後、添削内容を踏まえて痒いところに手が届くことを心掛けて解説に入ります。もちろん、解説は生徒たちと私たちがやりとりをしながらインタラクティブに進みます。

この授業内演習を軸とした仕組みはグノーブルの生命線です。生徒たちの演習、私たちの添削、解説時のやりとりのすべてが生徒と講師の「知の真剣勝負」と言えます。授業の筋書きはその場で刻々と変わり、授業が終わってみると全く予定調和ではない、その日だけのドラマが誕生しています。

この授業の仕組みには、生徒自身が自分たちと向き合

い、より成長するためのきっかけを見つけていけるような工夫もあります。演習の最中に感じる手応えや、添削時に私たちが書き込むコメントからも課題に気づいていただけるでしょう。また、解説時にやりとりをしていると、時には私たちも感動するような素晴らしいことを発言してくれる生徒がいます。そんな時には、いつも以上に周りの生徒たちの心は揺さぶられているでしょう。大人からの刺激よりも、同年代からの刺激は大きな影響力を持つことが多いものです。



5. 生徒たちに注ぐまなざし

生徒たちは将来に向けて成長していく存在ですが、その成長には、しっかりと見守り応援していく先輩・大人の存在が大切ではないのでしょうか。もちろん、ヘリコプター・ペアレントと言われるような存在として目を光らせているわけではありません。また、先回りしてお膳立てをし、大人が決めたルールに生徒を乗せるのでもありません。そうではなく、生徒たちを信頼し、長期的に成長を見守る、いいコーチ役でありたいと私たちは考えています。

1週につき2時間あまりと定められた時間は私たちと生徒たちのやりとりで、一気に駆け抜けていくようにも感じられますが、私たちは添削をしながら(学年・科目によっては、授業外でノートや答案用紙にコメントをつけながら)、生徒たちの今と、成長の過程に、いつも気を配ります。授業中に生徒たちが見せてくれる表情にも、授業前後の様子にもまなざしを向けています。それは、生徒たちの成長が私たちの喜びだからです。

グノーブル生の中には、学校行事や部活動などに本当に熱心に取り組んでいる生徒がいます。時にはその活動に時間もエネルギーも奪われて、勉強に集中できないことを悩んでいる生徒もいます。自分の殻を破るきっかけが見つからずにもがいている生徒もいます。生徒たちの様子から、生徒たちの頭の中の葛藤や信号は見落とさないよう心掛けています。

私たちは、生徒からの質問や相談も待っています。質問を受けて初めて、生徒の皆さんの受けとめ方、こちらの教え方の不備に気づけることが多々ありますから、とてもありがたいことだと捉えています。授業で扱った題材、勉強や進路のことなど、グノーブルの授業前後をはじめ、受付や電話、メールでも質問や相談を受けています。

しかし、私たちは、生徒たちが自分で考えることを放棄した指示待ち人間になってもらいたいと思っているわけではありません。たくましい若者に成長してもらいたいと切に望んでいます。

ですから、最後は生徒自身が考えて決断を下せるように、一定の距離を置いているのも事実です。生徒たちは回答を言ってもらえるものと待ち構えている場合もありますが、困難に遭遇した時こそ、殻を破って成長する好機としてその困難に立ち向かってもらいたいと思っています。

ストレスを発見し、ストレスという言葉を一般化させたカナダの生理学者ハンス・セリエ (Hans Selye) は、「強い刺激は病気を引き起こすけれども、ストレスと言われる刺激の中にも、それがあることの方がかえってその人間が健やかに生きられるもの、いわば『善玉のストレス』がある」と晩年に語っています。

生徒たちにも、自分の足でたくましく歩けるようになってもらいたいという思いで私たちは向き合っています。生徒が自分で成長する力を身につけられたら、ある意味で私たち大人の任務はおしまいです。そしてこれに代わる喜びはありません。

私たちは、有名大学への合格実績を追い求めている塾ではありません。私たちは「生徒の成長」を一番考えています。困難を乗り越えていく力、レジリエントな「知の力」を身につけてほしいと願っています。

6. 大学受験の選択

今の大学入試の形態は、一般入試をはじめ学校推薦、AO入試など多岐にわたります。さらに、2020年度(今の中3生)からは新大学入試が始まります。勉強の計画を立てて、目標に向かって努力していくには、的確な情報の収集が不可欠になりますから、どの受験生も、そして、保護者の方も、安心できる情報の収集を心から望んでおられると

思います。

しかし、私たちは、的確な情報収集を、受験する本人が主体的に行うことが大切だと考えています。大学受験の選択は、バック旅行の選択とは大きく異なるからです。手軽な旅行は、代理店が提示してくれる選択肢からチョイスして指示に従っていれば楽しめますが、大学受験は人生における大きな選択ですから、ぜひ生徒の皆さん自らが主体的に行動してもらいたいと思います。

主体的な行動は、始めは恐る恐るであったとしても貴重な経験になり、経験は自信につながり、それが、カナダの心理学者アルバート・バンデューラ (Albert Bandura) が提唱している「自己効力感」へと発展します。

「自己効力感」というのは、自分の決断や行動が効果をちゃんと生み出せると思える自信のことです。スポーツの試合や、音楽の発表会など、大きなイベントに出た経験を思い起こしてください。自分のパフォーマンスはまちがいに効果を生むと自信を持っている人は、その場をコントロールできますから、不具合があっても調整できます。特に対戦型のスポーツの場合は、「自己効力感」を持つ人(チーム)のパフォーマンスが他を上回ることになります。自分が場をコントロールしている、コントロールできるという気持ちがないと、少しでも不測の事態が発生するとすぐに気持ちがぐらつくことになります。

私たちは喜んで、生徒の皆さんの相談に乗ります。しかし、「最後に決断を下すのは自分自身。決断に責任を持ち、自分を律して進んでいく」という覚悟を生徒の皆さんには持っていただければと思っています。

「大学受験をするか否か」、「国内か海外か」、「どの大学か」、「どの学部か」、「何校受験すれば良いのか」、「受験日が続いても大丈夫か」など、これまでも様々な相談を受けてきました。これからも、いっしょに真剣に相談事に向き合います。その上で最後は自分で決断を下してもらいたいのです。生徒の皆さんが自分で調べ、自分と向き合い、自分で考え、自分で決定し、自分で責任を持って遂行するという姿勢を応援したいと思っています。



《インタビュー》

自ら考え、自ら決断し、 自ら責任を引き受ける

取材：吉村高廣

グノーブルのスタンス

吉村：塾の中には保護者会や三者面談を頻繁に行うところもあります。グノーブルでは、保護者に対してどのような働きかけを行っているのでしょうか。

秋好：中学生は保護者会、今は名称が変わって“学習ガイダンス”を年に1回、10月に行っています。ガイダンスではまず、学年ごとの会場で各科目の全体的な話をし、その後にご来場いただいた保護者の皆様から個別の相談を受けます。またお越しになれなかった方も相談のご希望があれば随時、電話や直接お越しいただく面談の形で対応させていただいています。

高校生については、高2までは、1月、4月、9月に“学習オリエンテーション”があります。これは、新しくグノーブルに入られた方、または科目追加をされた方に向けての指南的な催しです。高3については、公式の催しの機会は設けていません。

吉村：保護者の方から、三者面談等をやってほしいという要望はないのでしょうか。

秋好：そうした声も頂戴しています。最近も高2生の保護者から「なぜグノーブルには三者面談がないのか」というお問合せをいただきました。

高2、高3、もしかすると中学生のうちから、塾や勉強の話を家庭内ではしないお子さんもいます。そうしたことから、子どもの学習の進捗状況を把握したいと思われるのも当然かもしれません。また、クラス分けテストで、クラ

スが下がる判定を受けたり、なかなかクラスが上がらない場合、きっと不安を抱える保護者の方もいらっしゃると思います。

そのような場合、ご連絡をいただければいつでも、電話での対応や実際にお会いしての面談も随時行っております。

ただ、大学受験グノーブルでは、生徒たちと講師との普段からのつながりを密にして、長期的に科目指導をしていく態勢を重視し、そちらにエネルギーを注いでいます。例えば英語の場合、授業開始時の演習とその添削を毎回行っています。その場で生徒たちが解いて書き上げた答案を回収し、担当講師がすぐに目を通しコメントを書き入れ、その場で返却します。(高2英語「演習プリント」参照)

一人ひとりの答案と向き合いながら、私たちは生徒たちの成長の軌跡や、もしくは伸び悩んでいる様子を記憶に留めていきます。同時に、すべての答案を踏まえて、授業中に詳しく説明すべき事項などもインプットして解説に備えます。

視線を向けるのはもちろん答案ばかりではなく、まずは生徒たちの表情です。教室に入ってくる様子、演習に取り組んでいる時、解説時やノートを取る時の姿から、集中できているのか、疲れているのか、楽しめているのかなど、いろいろなことを感じ取っています。グノーブル生の中には、文化祭や運動会で重責を担っていたり、部活の大会前の練習でへとへとになってグノーブルにやってくる生徒もいます。修学旅行の帰りに、直接グノーブルに駆けつけて授業に出席する生徒もいます。

授業内では、生徒の調子の良い時も悪い時も、その時々の様子を感じ取るようにしています。気になることがあれば、授業後に声をかけたり、添削時にコメントをつけたりします。

また、私たち教える側は、中学生も高校生も子ども扱いしたくないと思っています。生徒たちをたくましく成長する途上にある一人の人として尊重したいと考えているからです。大学受験に関しても、生徒たちが主体的になって、自分と向き合い、自ら考えて決断を下し、「自分の決めたことだからやり抜く」という強さを身につけられるように見守っていきたくと思っています。

サポート体制と指導方針

吉村：塾のスタンスはわかりました。ただ、大学受験のこと、我が子の塾での様子をもっと知りたいという親御さんもいらっしゃるのではないのでしょうか。

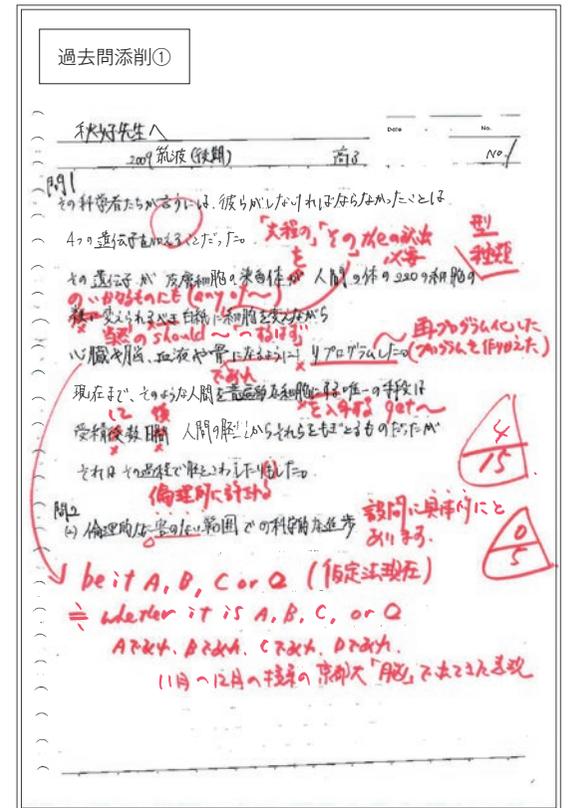
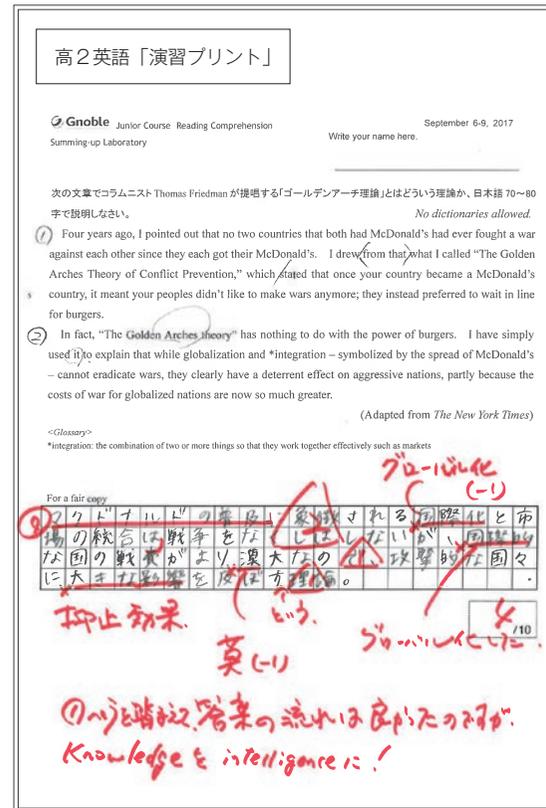
秋好：はい、いらっしゃると思います。その回答のひとつとして、この「Gno-let」や新入試や受験情報に関する「Gno-info」という発行物を制作して、常に新しい情報提供を行っています。また、必要とあれば、保護者の方との電話やメールでのご相談、また面談もご要望をいただければ

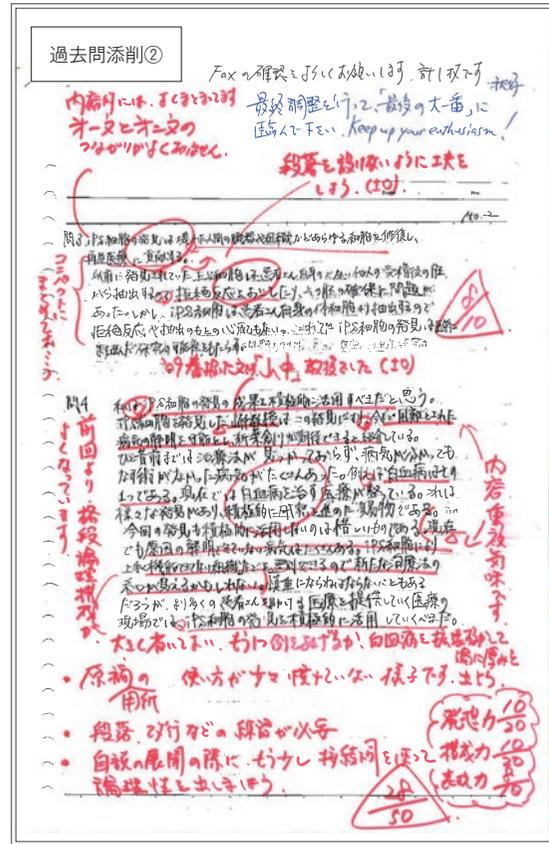
個別に対応をしています。相談を全く受け付けないということではありません。つい最近も、クラス分けテストの結果を踏まえて高2生の親御さんと面談をして、受験全般のこと、数学や国語や理科のことについても、各科の先生と調整の上、対応をさせていただきましたし、電話での相談はさらに頻繁です。

しかし、大学受験の場合の親御さんとの面談の場合、「先生から本人におっしゃってください」という流れになることがほとんどです。だからといって、私たちから口で言えば生徒たちに伝わり、勉強への態度が一変するとはなかなかいきません。やはり、普段からの生徒たちとのつながりがこそ大切です。

生徒たちが勉強に目覚めていくという観点から言えば、例えば、英語なら科目の特長を活かして、世界のいろいろな面に窓が開いているような英文を用意するのもしかけのひとつです。世界で今起こっていることが書かれた英文を用意していくと、生徒たちの関心メーターの針がピョンと上がるのはよく経験しています。

一人ひとりにオーダーメイドの対応も大切です。受験期になれば、志望大学の出題傾向の相談や直前期には過去問添削を受け付けています。もちろん、添削費はいただいていません(笑)。(過去問添削①・②参照)





これも英語の話になりますが、高3になると、読解と作文の授業をそれぞれに別の講師が受け持ち、違う角度から二人の先生が指導していくという「ダブルティーチャー制」を敷いています。そうすることで、生徒にとってより話しやすい先生に相談に行くことも可能になります。

このダブルティーチャー制は、2017年の新中学1年生にも導入し始めました。よくあるチューター制では、普段の生徒の様子をあまり知らないチューターが、一般的な観点から相談に乗ることになってしまいます。その点、ダブルティーチャー制は違います。繰り返しになりますが、グノーブルでは生徒を子ども扱いせず、主体性を育むことが何より大事と考えています。複数の講師が違う角度から生徒の特徴を把握し、生徒をしっかり見守っていくというのも、そのための仕組みのひとつであり、2018年からは中学1年と2年の両学年で実施していきます。

吉村：学年が上がったり、クラスが変われば先生も変わります。その時のサポート体制はいかがですか。

秋好：一人ひとりの生徒たちの成長こそが何よりも大切なので、大事な教え子の必要な情報は次の担当者と共有していきます。

学年が上がる場合も同様です。例えば、私が受け持つ高

2の生徒は、受験学年になると別の担当が受け持ちます。その生徒の学習状況や生徒の特徴をこちらから伝えることも、次の担当から改めて聞かれることも頻繁にあります。これが私たちの日常会話でもあるのです。開講している英語、数学、国語、理科の講師間でも生徒の情報を共有するようにしています。職員室の中で、科目が異なる先生同士が同じ生徒の授業中の様子、その生徒の学校での活躍ぶりなどを話題にすることも珍しくありません。

科目を横断して他教科の先生方から生徒の情報を教えてもらい、一人の生徒のことを複数科目で考えることもよくあります。ある生徒が、他科目の受講を追加したい場合に、該当科目の先生への引き渡し役を引き受けることも多々あります。

他塾や予備校のことはよくわかりませんが、グノーブルの職員室の中では、同じ科目内はもちろんのこと、他科目の先生とのリレーションシップも強固であるため、塾全体で一人の生徒をバックアップする体制が整っていると思います。

生徒たちから時々耳にするのが、塾や予備校によっては、同じ科目でも、先生が異なると指導方針や指導方法もかなり違うことがあるという話です。グノーブルでは頻繁に行われるミーティングでよりよい指導を目指していますし、研修制度も充実しています。指導理念や指導方針に変わりはなく、安心して勉強に集中していただけるはずですよ。

主体性を育む取り組み

吉村：塾を選んだのはお母さん、という話をよく聞きます。大人の冷静な目で選択するのは悪いことではありませんが、大学受験には親としてはどのようなスタンスがいいでしょうか。

秋好：各ご家庭にそれぞれの事情があるでしょうから一概には言えませんが、私たちとしては、大学受験がお母さんの受験になってしまうのではなく、生徒本人が選び取っていくのが本来の姿だと思います。理想を言えば、子ども部屋からは毎日音読をしている声が聞こえてきて、そのがんばりを母親が温かく見守り、栄養のバランスを考えた美味しいお弁当や食事を作ってあげる、そんなサポートに専念してほしいとお母さんたちにはお伝えしたいです。

そのためには、「助走期間」と言いますか、中学生から高校1年、2年までの過ごし方が大切になります。科目の勉強だけに留まらない学校生活の過ごし方、例えば、学校行事や部活動での経験は、やはりお子さんにとっては大きな財産になると思います。

学校生活に限らず、夢中になって取り組めるものとの出会いはお子さんにとってとても大切なことです。親として

は、目の前の成績が気になってつい制限をかけてしまいがちですが、何かに打ち込んだ経験のあるお子さんは、いざ受験勉強に向かうと、大人が驚くような集中力と持続力を見せることはよくあります。

お子さんにとって一番身近なロールモデルはやはりご両親です。お父様とお母様がどんなことを食卓などで話題にしているのか、つまり、お子さんが普段からどんな会話を耳にしているのかも、子どもたちの受験に向かう姿勢には大きな影響があると思います。世の中で起こっていることに、ご両親が表面的な雑感というより、もう少し深い話をしていくと、お子さんたちは興味を持って耳を傾けていくかもしれません。子どもたちは親がどんなことを考えてきて、少し大げさに言えば、どんな哲学を持っているのかということ意外に知らないものですし、そういうことに興味を持っているものです。少し深い両親の会話を聞きながら、それを通して子どもたちが自分らしいものの考え方を身につけていくこともあるでしょう。

吉村：現代の生徒たちには、塾の先生も身近にいる大人だと思いますが、グノーブルとして心掛けていることはありますか。

秋好：「2つの磁石」を大切にしていることです。ひとつは「マグネットとしての磁石」です。授業や講師に惹きつける力があれば、それぞれ、修学旅行から家に寄らずにグノーブルに足が向かいます。意欲的に取り組めることと、義務感でいやいや取り組んでいることでは成果にも違いが生まれるでしょう。

もうひとつは、「コンパス」、つまり「方位磁石」です。勉強が楽しくても、志望大学合格の得点力に結びつかない勉強であれば、それは生徒たちへの裏切りですから、我々はしっかり、目指す大学に合格して、その大学で活躍できるように生徒たちをナビゲートしたいと思います。そのために、ともに (= com)、歩く (= pass) ことをお約束します。生徒たちにとっては、大学受験の勉強は、これまでの人生で恐らく一番高い山に登る挑戦です。私たちがだけ高みの見物を決め込むつもりはありません。いっしょに登山をしていきます。

「受験勉強に親御さんは関わらないでください」というのではなく、保護者の方にご信頼いただき、「いい塾で良かったね。グノーブルでがんばりなさい」とお子さんに言っていただけるよう努力するつもりでいます。ご不明な点などがあれば、電話やメールでお尋ねください。ご納得いただけるようにお応えしていきます。また、必要な点は改善いたします。ご家庭でのお子さんの様子で気がかりな点もお教えてください。個別の対応をしたり、解説時の話を工夫していくなど、良い方向に向かえるように努めます。

吉村：主体的に取り組むために、生徒の皆さんへのメッ

セージとしてはどのようなことが挙げられますか。
秋好：一歩一歩歩みましょう。いきなり主体的でたくましい生徒に豹変することは難しいですから、小さなことをひとつひとつ積み重ねていくのがコツです。

グノーブルに通い始めたばかりの時に、周りの生徒たちが皆優秀に見えて「それに比べて自分は……」と、落ち込んでしまうという話を聞くことがあります。確かに、グノーブルの授業で演習が始まると、全員がさっと集中して空気が引き締まります。初めての人は、その迫力に押されてしまうかもしれません。また、解説は先生と生徒のやり取りで進みますが、自分がわからない質問にさっと答える人たちの姿は自分と違う光を放っているようにさえ見えるかもしれません。実はそういう人たちは、授業を楽しんでいるのです。グノーブルの場合、真面目にがんばるといって、楽しもうと心掛けることが秘訣なのです。

授業を楽しむには、理解を優先することが大切です。理解できていないのに板書をただノートに写すのはただの作業にすぎず、作業は楽しくありません。理解できていないことには、「どうして？」と、素直に疑問を持ちましょう。「どうして？」と思っている時に解説を受け、「なるほど！」と思えると少し楽しくなります。それに、そもそも「どうして？」という問いかけは、前向きで主体的な心の動きです。その姿勢を積み重ねていくということは、勉強を楽しむ達人の道を進むこととなります。

時には簡単には理解しづらい事項に出会います。簡単に諦めて解説を待つのではなく、しつこく食いついてみましょう。もし自力で理解できれば、「難しいことがわかる時は理解の喜びも大きい！」と実感できます。



でも、自分だけで解決できないことは、自分だけで抱え込まずに、もちろん放置もせず、授業の前後などに担当の先生に声をかけてほしいと思います。喜んで解決のお手伝いをします。

先生に声をかけるということは、すでにその時点で前向きな姿勢です。繰り返しになりますが、前向きな姿勢は、勉強を楽しむ秘訣です。

それに、質問や相談をしていただけると私たちも助かるのです。私たちは、解説時にも添削時にも、なるべく皆さんのことを察するように心掛けてはいますが、それでも見落としていたり、気づけないことは多々あります。皆さんから疑問点や悩みを教えていただければ、次からはその点を踏まえて授業に臨めるので大助かりなのです。

添削対象のプリントにメッセージを残していただくのもいいでしょう。私たちからも、添削して点数を書くだけでなく、何か気づいたことをコメントとして残すことがよくあります。

吉村：添削のプリントで、メッセージやコメントのやり取りがあるというのは面白いですね。例えばどんな内容のメッセージがあるのでしょうか。

秋好：生徒たちからは、「宿題テキストを忘れて借りたばかりなので自信はないですが、解答は頭の中に残っています」とか、先日は「化学グランプリで二年連続入賞しました」といううれしいメッセージもありました。こちらからは、「文化祭での大役お疲れ様でした」とか、演習中に一生懸命眠らないようにしている時などは「今日は疲れているみたいですね。部活？」といったことです。

生徒との間に、ある程度の信頼関係ができてきたと感じられる場合には、厳しめのコメントも残します。時には率直な書き方ではない場合もありますが、「先生はどうしてこう書いたのかな？」とお考えいただくことが大事だと思っています。

ただ、厳しめのコメントを書くのは、こっちにも伴走する覚悟があるからです。時には生徒たちが打破すべき壁は大きくて厚いかもしれません。それを打ち破るには四苦八苦するかもしれません。立ち向かう勇気や気力も必要です。私たちも懸命に応援するので、生徒たちにもがんばってもらいたいと思ってコメントを書いています。

吉村：質問や相談は、人に頼りすぎる姿勢につながってしまう懸念はありませんか。

秋好：質問や相談は対話の始まりだと考えています。「英語の勉強の仕方を教えてください」といった漠然とした質問でも、対話が始まれば、質問した生徒自身の考えが自分自身と向き合う方向に進んでいきます。今まではどんなやり方だったのか、今の自分に何が足りていないのか、これから先は何に焦点をあてて取り組めばいいかなど、少しず



つ自分のことが見えてくるようです。質問や相談は、一歩踏み出せば、だんだん進化も深化もしていくと思います。

ただし、受験情報のようなものに関しては、人に聞けば解決できるとか、いつでもスマートフォンで調べればわかるという姿勢は問題です。情報は、頭の中に整理された状態で入っていないといざという時に役立ちません。大学受験はかなり大がかりな長期戦ですが、必要な情報が視野に入っていなければ的確な計画を立てられません。情報を自分で取りに行くことで、それが頭の中に整理されて役に立つものになります。

吉村：最後になりますが、中学・高校時代にやっておくべきことはありますか。

秋好：やはり、自分で興味を持ったものをとことん情熱を持ってやってほしいと思います。そうして身につけた体力や知力、傾けた情熱や心に響いたことは、直接的ではなくとも大学受験やさらにその先へとつながっていきます。

それは文化祭や運動会などの学校行事や部活、それから、国際数学オリンピックなどの国際科学オリンピックを目指すのも、あるいは、スポーツや読書、ボランティア活動でもいいと思います。

もちろん、「グノーブルの勉強を誰よりも楽しむ」というのも大歓迎です。生徒の皆さんが精一杯楽しめる教材の用意に、こちらもお心を出して取り組んでいきます。

目指すのは4技能の習得ではなく、英語学習の“本質”です。

2020年度から大学入試センター試験に代わって本格始動する『大学入学共通テスト（以下、共通テスト）』の英語に、民間試験の導入が決まりました。また文部科学省は、共通テストに採用する民間試験を年度内に決める予定。複数の民間試験が候補として挙がっており、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能の力が測られます。こうした受験制度の大改革をグノーブルはどのように見ているのか。大学受験グノーブル・英語科の清水誠先生にお聞きしました。（取材：吉村高廣）



英語科
清水 誠

英語4技能を考える

吉村：センター試験廃止後の共通テストで、英語は4技能（読む・聞く・書く・話す）を問われることになりました。その対象となる生徒（および保護者）の中には気がかりな方も少なくないと思いますが。

清水：従来でもすでに「読む」「聞く」「書く」は大学入試で試されてきているので、焦点となるのはやはり「話す」力になるでしょう。

大学に入学した後で英語を使ってやり取りをする。あるいは社会に出た後、実用的にコミュニケーションをとっていくという意味では話す力は必要不可欠です。それが大学入試に組み込まれたことは歓迎すべきことではないで

しょうか。むしろ今まで、なぜ話す力が問われなかったのかと思うくらいです。子どもたちの将来のことを真剣に考えるなら4技能を問うことは必然と言えるでしょう。

吉村：それに伴って「4技能対策」を設ける塾もありますが、グノーブルには今のところ新たな講座の開設はありません。なぜでしょう。

清水：それは塾の目指す方向性が違うからです。中には、対症療法的に「4技能対策」という形だけ整えれば良いという姿勢の塾も見受けられます。一方、グノーブルでは「知の力を活かせる人に」というスローガンを掲げています。そしてその想いが我々の目指す一番大きなポイントであり、私たちは英語教育を大学入試という一過性の

ものとは考えていません。つまり技能対策ではないのです。

吉村:しかし、スピーキング対策のためにネイティブの先生がいる英会話塾に通った方が良いのでは、と考える方がいても不思議はありません。

清水:英語で話をすることに慣れるという意味では、英会話に通うのも全く意味がないことではないでしょう。ただ、週に1、2度ネイティブと話したくらいでどの程度の力が身につくかは大いに疑問です。仮にそれが受験対策であったとしてもです。

結局のところ、ペラペラと流暢に、そして楽しく、ネイティブと日常会話レベルのコミュニケーションをとりただけであれば、短期留学でもして現地ですばらく過ごせば良いですし、特に高等教育を受ける必要もないでしょう。もちろん流暢に楽しく話せることも重要なことですが、グノーブルが提供する英語教育は、英語の特質として日本語と大きく異なる部分があることを理解して、その本質を学んでいただくことです。

吉村:その英語と日本語の差異とは、どのようなものでしょう。

清水:まず、日本語は受け取り手が相手の言いたいことを察するコミュニケーションを軸としているのに対して、英語は発信者が責任を持ってすべてを明確に述べていく言語です。したがって、英語でのコミュニケーションをする時には、すべてが伝わるように、きちんと論理的に話を組み立てていく必要があります。自分の言いたいことを客観的に捉えて説明していくための分析的な力も当然必要になります。グノーブルでは、6年間継続してこうした訓練を行って

いるのです。一見、“流暢”に見えるネイティブとお喋りができるレベルを目指しているわけではありません。

保護者の方々も同じ思いのはずです。グローバル化という言葉が当たり前になっている時代の中で、英語を使って学術的な研究を進めたり、海外企業のビジネスパーソンと対等に渡り合い、リーダーシップを発揮できたりするような人材になってほしい。そう望むのは当然のことだと思います。そこを目標に考えると、目指すべき英語力のレベルは「楽しくお喋り」とは格段に変わってきます。それはまさしく、知の力を身につけている教養のある英語です。

とはいえ、全方位のパーフェクトな英語力を身につけるということは、やはり目指せません。何故かと言えば、受験生にはそれだけの時間がないからです。英語以外にもあらゆる科目を勉強しなくてはなりません。では、どこを重視するのかというと、“英語の持つ論理性や教養に裏打ちされた知の力を活かせる英語”、まさにそこを目指すべきなのです。そういった次元での頭の使い方をきちんとできるように鍛えることが、グノーブルの存在意義だと考えています。

全学年に用意された音声教材

吉村:「とにかく会話のための訓練を」という要望を持つ保護者の方もいると思うのですが。

清水:グノーブルが会話の訓練をしていない、というのは間違った理解です。グノーブルでは発足当初から、英会話の授業こそ行ってきてはいますが、会話をする上で必要な訓練は常に行っていました。



英語は、単語を体系に沿って並べ、話すことが必要です。さらにそれを、ある程度瞬発的に行うためには、日常的にトレーニングを積み上げていくことが大切になります。実はそうしたトレーニングをグノーブルでは中学生から全学年にわたってGSL*1を使って行っています。

中学生は、英文法のエッセンスを短文に取り入れたGSLを使っています。復習時にしっかりと聴解と音読に取り組み、積み上げていくことで、中学生の段階から正しい英文法の原理を瞬間的に引き出せる状態をつくっていきます。高校生はもっと長い英文のGSLを活用することで、様々なトピックのスピーチの練習ができることを意図しています。よく歴代のアメリカ大統領などの演説を使ったスピーチ練習用の教材が市販されていますが、グノーブルの教材では、もっと身近で多様な話題を用いて英文の組み立て方を練習できるように工夫されています。

そして、これはどの学年にも言えることですが、GSLを使ったトレーニングを日常的に積み上げていくことが何より大切です。

肝心なことは、頭の中に何も入っていないのに、何かを外に出すことはできないということなのです。つまり、上辺だけのアウトプット（会話）の練習をどれだけやっても、会話を構築する語彙、まとまったことが言える英文の蓄積、話の組み立て方の知識を培っていないければ、ほとんど効果は期待できません。日本語で世界史や科学の知識を持っていても、それを英語でどう表現するのかを知らなければ、知的にレベルの高い会話は全く成立しないのです。

具体的な学習法としては、まず授業で扱う内容をしっかり理解することが重要です。次に毎回の授業に対応したGSLを利用して、聴き取れる耳と、発音できる口を鍛えていけば、着実に豊かな言葉の引き出しや、英語での教養を蓄えていくことになります。

グノーブルでは、高校生になると英文の難度が徐々に上がり、英語圏の大人が接している英文になっていきます。最終的にはかなり高度なものを扱っていきます。授業で理解した英文は、復習時に音読し声に出していくことで、体になじませていくことができます。自分の部屋で音読する時も、大勢の前でプレゼンをしているような気持ちで、ジェスチャーもつけながら取り組むといいでしょう。

これは、GSLの録音時のエピソードですが、音声の収録現場で、ネイティブのナレーターの方たちにスクリプトを渡した時、「高校生にこんなにレベルの高い英語を教えているのか!」と驚かれたことがあります。内容自体は普段授業で使用している要約プリントと同じレベル、すなわち東大の要約レベルです。「今まで日本人を相手にした、市販用の様々な教材の録音をしてきたけれど、これほどのレベルのものは初めてだ」と言われました。つまり、グノー

ブルの目指しているレベルは、市販の音声教材とは異次元のもので



発信型の英作演習 & 添削

吉村:自分の考えを自分の言葉で発信していく練習についてはいかがでしょうか。

清水:発信の練習用には、GCLと名付けた英作演習と添削の仕組みがあります。Gnoble Creators' Laboratoryを短縮した名称ですが、Creatorsとあるように、生徒たちが英語で創造的に考えて書けるようにすることを意図しています。

具体的には、中学1年生から6学年すべてにわたって英作文演習と迅速な添削を行っています。特に受験学年では英訳に加えて大量の自由英作文演習と添削を行います。演習と添削の量においても返却のスピードにおいてもグノーブルほど充実している教育機関はまずないのではないのでしょうか。

中学生から高校2年生までの演習の中心は英訳です。単語や熟語、英文法の知識は、文の形で頭の中に入っていると使える技能になりますから、生徒たちにはたくさん英文を書いてもらっています。そして添削を通して正しい使い方を習得してもらっています。受験学年には英語のまま考えて表現していく自由英作文に取り組む機会を豊富に用意しています。

語学の習得には身につけたことをどんどん積極的に使ってみることが大切です。実際、自由英作文を書く時に、読解の授業で習った英文を利用して、話の展開までまねする生徒がいます。どんどんまねをしてほしいと思います。他にも自由英作文で使えるような表現に教科書などで出会ったり、自分の頭で思いついたりした時に、それをスマートフォンに書き留めていた生徒もいました。いい習慣だと思います。

*1 Gnoble Sound Laboratory : 中1から高3までの6学年すべてに、通常授業でも、季節講習でも、毎回新たなオリジナル英語音声教材を用意しています。



習った表現や思いついた表現を使いたくなる環境は大切です。グノーブルの受験学年では、書いて提出すると、すぐに添削されて返ってくる英文の機会を毎週設けているのです。

また、「読む」「聞く」「書く」「話す」を4技能と言いますが、これらは、ばらばらな技能ではなく、互いに結びついています。「読む」「聞く」「書く」力を伸ばすことは、英語で「考える」力も鍛えることになり、もちろん「話す」力の土台になります。あとは会話の場数を踏んで経験を積み重ねるのです。「読む」「聞く」「書く」の蓄積がないのに、「話す」練習に励んでもほとんど成果は期待できません。

どの民間試験を目指すか

吉村: 現実的な話をひとつお聞きします。先頃第2号を発行したグノーブルの情報ペーパー「Gno-info」では、民間資格、検定試験について取り上げていますが、どの試験を視野に入れれば良いのでしょうか。いろいろと情報が錯綜していて混乱する方も多いと思います。

清水: 試験によってかなり難度が変わります。例えば、TEAPとTOEFLでは、TOEFLの方が難度が高いわけですが、大学受験という目先のことを考えれば、より難度が低い試験の方が受験生にとってはありがたいはず。しかし、繰り返し申し上げている通り、私たちが生徒の皆さんに指導している英語は、知的レベルの高い英語です。したがって最終的にはTOEFLレベルの対策を立てる必要があると思っています。つまり英語で読み、英語で聞き、その内容について正しく理解し発信する（書いて話

す）というintegrated task（統合型の問題）に対応できる力の習得です。

ところが多くの場合、言葉のfluency（なめらかさ）が整っていれば、英語ができていくことになっています。だから帰国生たちが英語で話していると、「すごい!」と思ってしまう。ところが、要約をやらせたらわかりますが、深く読んでいる帰国生もいれば、そうではない帰国生もいる。それでも本人たちは「英語ではわかる」と言うのですが、本質的な理解という点でわかっていないし、読めていないこともあるのです。

そのような部分を見過ごした教育は、私たち大人としてはやってはいけないことだと思っています。本質的な部分を疎かにすると、将来留学して成果をあげたり、国際社会に出て活躍する夢を実現する時に足を引っ張ってしまうことになるからです。

吉村: ということは、「どの民間試験になるか」という次元で大騒ぎをしていると、その合格点を目標して勉強することだけが高校時代の英語学習となり、結果的に本末転倒なことになると。

清水: 結局そうなります。もちろん試験への対処は必要なことですから、今後グノーブルでも外部試験に対応した形のプログラムを提供することは、グノキッズ*2の先生方と具体的に検討しているところなんです。

しかし、目の前のスコアを上げればいいということではありません。スピーキングがあるからといって、それに振り回されて、ネイティブと話すことにばかり力を入れるようなことが効果を上げないことは先ほどもお話した通りです。

今回の教育改革の本質は、将来活躍できる人材として、どのような力をつけて社会に出て行くのかという問題に行き着くものだと思います。それを踏まえての対応が、グノーブルの果たす役目であり、今までもそれをずっと一貫してやってきました。

このグノレットには卒業生の伊藤龍一さんのインタビュー*3が掲載されています。その中で「(模擬国連の)議場を出た途端、ネイティブの人たちは猛烈なスピードで雑談を始め、そのスピードにはなかなかついていけませんでした」と話されていますが、大切なことは、ニューヨークで開催された模擬国連に、伊藤さんは英語を使ってしっかりと参加できていたということです。海外で暮らした経験がなくても、知的にレベルが高いコミュニケーションは実現できるという証になっていると思います。

吉村: グノーブルで学習をしていけば、実は4技能入試はそんなに方向性の違うことをやるわけではない。そこまで抜本的な勉強方法の転換を迫られるものではないと。

清水: おっしゃる通りです。今は4技能云々が大きく取沙汰されていますが、英語学習がより高い質の成果を追求

するものになるという点では何年も前からグノーブルがやってきたことと変わりありません。

実績が裏付ける塾の理念

吉村: とても心強いお話ですが、最後に保護者目線で、あえて意地悪な質問をさせてください。その自信の裏付けはどこに。

清水: それは論より証拠で、卒業生たちの実績が物語っています。伊藤龍一さんの例もそうですし、これまでのグノレットを振り返って見ていただければ、いかに多くの卒業生の方々が様々な分野で英語を使いながら活躍されているのかが十分におわかりいただけると思います。

例えばグノレット18号には、研究者として、また医師として、さらには一流企業のビジネスパーソンとして、逞しく活躍される卒業生の今が紹介されています。グノーブルの勉強は、大学受験で効果を発揮するのはもちろんのことですが、むしろその後大きく成長するための土台づくりにこそ重きを置いています。けっして受験に間に合わせるための勉強ではないということがよくおわかりいただけると思います。

それは我々が目指している方向性が、社会に出て活躍できる、つまり、知力を活かして前進できる人材の育成にあることの証でもあります。グノーブルは可能な限りそのような生徒さんの力になりたいと考えていますし、そういった方向性の塾であることをご理解いただけるものと確信しています。

吉村: 現在そうした部分を保護者の皆様はどの程度ご理解されているでしょうか。

清水: ひょっとすると世の中の一部の方たちは、ネイティブの先生がいるかどうかということをお子様の英語教育を選択する際の基準として考えていらっしゃるかもしれません。

しかし、最初に英会話のことで触れたように、たとえネイティブの先生を呼んでも、週に数回授業を受ける程度では根本的な会話力の向上は期待できません。それよりもGSLを活用して真剣に授業の復習に取り組んだ方が潜在的な英語力は、はるかに上がります。

グノーブルの理念について、保護者の皆様に積極的に興味を持っていただければありがたい限りですが、そのこと以上に、勉強をする当事者は子どもたちであるということをご理解いただくことが大切です。そして子どもたちがどのような気持ちでグノーブルに通っているかをご覧ください。私どもの“やり方”に必ずご納得いただけるものと思います。どの教室でも、授業が始まった瞬間からさっと演習に取り組む生徒たちの様子が見られます。飛躍的に英語の成績を伸ばしている生徒たちがたくさんいま

す。成績が上がればますます“やる気”につながりますが、生徒たちは、単に成績が上がっているだけではなく、論理的思考力や教養まで含めた英語力を伸ばしているのです。

そのために我々にできることは、子どもたちが生き生きと授業に取り組めるように準備と環境づくりを行い、その結果として保護者、生徒の皆様が安心してグノーブルにお通いいただけるより良い実績を今後も積み重ねていくことと考えています。



【取材後記】

2020年度から本格的にスタートする共通テストですが、数学と国語については、ほぼ明確な指針が示されているものの、英語についてはあくまでも憶測の域を脱しない情報が飛び交っており、不安に思う方も少なくないと思います。

しかし今回の取材で改めて実感したのは、グノーブルの考える英語教育は、大学受験を突破するための対症療法ではなく、受験を超えて英語を使いこなすための訓練なのだということです。したがって、これまでの3技能評価から4技能評価になろうとも「右往左往する必要はない」ということを確信しました。

そのあたりについては、実際にグノーブルで学ぶ生徒の皆さんは実感されている方も多いのではないのでしょうか。むしろ不安を抱えているのは、子どもを見守る保護者の皆様の方かも知れません。

子どもを信じ、じっくり未来を見据え、グノーブルとともにサポートをしていただければ幸いです。

*2 英会話グノキッズ (www.gno-kids.com) 0歳児から小学生を対象とした英会話教室。本誌43ページに記事を掲載しています。

*3 本誌21ページに掲載しています。

グノーブル
卒業生
インタビュー

たかだ しゅうた
2期生 高田 修太さん

HLAB, Inc. 共同創設者
事業開発ディレクター

(開成/東京大学大学院工学系研究科
社会基盤学専攻修士課程修了)



自分がやりたいことをやるために、
英語が話せないのが許されない時代が来る。

共同生活から新しい学びが
生まれる

編集部：現在、高田さんはHLAB（エイチラボ）という教育・国際交流プログラムを運営する会社の幹部メンバーとして働かれています。事業の内容を詳しくお聞かせいただけますか。

高田：もともとは2011年からスタートしたサマースクールが始まりです。当時から最も良い学びの場は、寮生活を再現することであると考えていました。多様性のある様々な人々が同じ釜の飯を食べながら共同

生活することで、議論や交流が生まれ、そこから新しい学びが生まれるからです。

例えば、ハーバード大学でマイクロソフトや、Facebook が生まれたのもまさに寮での出来事です。Facebook は、ルームメイトの一人がアルゴリズムを書くことができ、さらに別の一人がビジネスの専門家だったりと、様々なバックグラウンドを持った人々がたまたま出会ったことで生まれました。そういった共同生活の中の学びとケミストリーはすごく大事だと思っていたんです。最初は「寮をつくりたい」という

思いがありましたが、当時はまだ我々が学生だったため、まずは短期的な再現としてサマースクールを始めました。現在は全国4カ所で行っており、東京で8泊9日、それ以外では長野、宮城、徳島で6泊7日のプログラムを実施しています。

そこではハーバード大学やイエール大学といったアメリカの大学をはじめ、イギリスなど様々な国の大学から学生を招き、さらに日本の大学生と選考をクリアした高校生と一緒に共同生活を行います。午前中は、海外や日本の大学生によるゼミのような形でリベラルアーツセミナーを

開き、自分たちの専門分野や興味があることに関して授業をしてもらいます。そして午後はゲスト講師による講演会やワークショップを行うキャンプです。

国籍の垣根を超えた寮生活を

編集部：アメリカでは、そうした取り組みを大学が行っているようです。ある経済誌に次のような主旨の記事がありました。

『グローバル人材をつくるにはリベラルアーツ教育が不可欠で、アメリカの大学には世界中から留学生がやって来てインターナショナルコミュニティが形成される。このコミュニティの中でもまると、誰もが強く母国を意識するようになり、学生たちは自身のアイデンティティを確立していく。一方、日本の大学では、留学生が圧倒的に少なくインターナショナルコミュニティが形成されない。結果、いくら文言だけのリベラルアーツを学んでも、日本人としてのアイデンティティは形成されない』。

いかがでしょう。やはり、留学生の数が少ない日本の大学では、インターナショナルコミュニティの形成は難しいのでしょうか。

高田：概ねその記事に同感ですが、最近ではいろいろな大学ががんばっているようにも思います。

国際基督教大学（ICU）では、寮を新しく建て、そこに留学生と日本人学生を住まわせています。また山梨県にある山梨学院大学のiCLA（International College of Liberal Arts：国際リベラルアーツ学部）でも、全寮制の学部として校舎と寮が同じ建物になっており、ファカルティ（大学の授業改革のための組織的な取り組み）を組んでいます。教授たちも外国人をそろえていて、新進気鋭の学部で非常に先進的だと感

じています。

一方、東京大学などは自分も通っていたのでわかるのですが、留学生もいるにはいますが、交流などはあまりありませんでした。最近では英語で授業が受けられるようになり、留学生も徐々に増えていることから、日本人と留学生が共に居住する国際寮も整い始めています。ですが、日本人は地方出身の人だったり、家庭収入によったりと、あくまで「安く住む」ことを主眼としていて、「教育機関」としての寮を定義しきれていない印象を受けました。

編集部：これからの時代を考えると、大学は国籍の垣根を超えてコミュニケーションをとることができるような環境をつくっていかないとはいえないわけですね。

高田：そうだと思います。アメリカも中国もほぼ全寮制で、実家から大学に通う学生の多い日本は稀です。ハーバード大学の僕の友人も、実家はボストンですが、あえてお金を出して寮に入っていました。それは寮が学びの場であることをわかっているからです。

例えば、イエール大学では寮を“Dormitory（寮、宿泊施設）”とは呼ばず、“Residential College（住んで学ぶ大学）”と呼び、寮を明確に教育機関と位置付けています。このことから日本とは寮への捉え方が異なることがわかります。

日本でもこのような寮の捉え方は、東大駒場寮や京大の吉田寮など昔はありました。しかし今は寮というと、汚くて、同じ人が長年住んでいて、偏った思想を持った人が集まっていて…とマイナスの印象が強くなってしまいました。新しい寮をつくっても、地方出身者や留学生のためのものではないかもしれません。

グローバル人材の条件とは

編集部：そこで質問ですが、近頃よく聞くグローバル人材の条件はどのようなものとお考えですか。

高田：どんなところでも、その人らしくパフォーマンスできることが、グローバル人材のひとつの条件だと考えています。それには、語学的なことももちろんあって、語学をクリアできれば、母語を喋るのと同じようなキャラクターで、どこでも誰に対してもそれなりのパフォーマンスを発揮できます。

ただ話すだけなら、必ずしも日本人のアイデンティティを持っていないでもいいと思うのですが、アメリカのリベラルアーツカレッジや留学先では、必然的に自分が日本人代表となり、それは否が応でも“日本人”を意識させられると思います。私もイリノイ大学に留学した時に、シカゴ出身でイリノイ州から出たことのないような人とルームメイトになったのですが、そこでは日本人代表にならざるを得ませんでした。

彼にとって私は初の日本人であり、私が教える日本のことはすべて彼の日本のイメージとなるからです。これは留学経験のある人で、マイノリティを意識する場に身を置いたことがあれば必ず実感することだと思います。

編集部：日本のことを聞かれたら教えなければならないし、わからなければ調べて情報を提供しようとする。すると、自分はこんなことも知らなかったのかと、自分の中で発見があるのかもしれない。

高田：まさにその通りです。イリノイ大学には日本館という公民館のような建物があり、そこで授業を受けることもできます。日本館の茶室をイベントで訪れた時に金髪の白人の方がお茶をたてて、英語で“わび”や“さび”について説明してくれ

たのですが、その時自分が何も知らなかったということに衝撃を受けました。

またアメリカでは政治の議論をすることが一般的で、電車に乗っていても普通に政治の話をし始めるなど、良くも悪くも政治議論がとても盛んな国です。私を交えて政治の話になった時は「どうして日本はあんなにプライムミニスター（首相）が変わるんだ」と聞かれましたが、私は答えることができませんでした。このことから自分は何も知らないということに気づき、基本的な日本の社会の仕組みや文化は知っておかないといけないと改めて思ったものです。

将来の進路を自ら探す一助として

編集部：話を戻して、HLABについて引き続きお聞きします。アメリカでもリベラルアーツ教育が行われるのは大学生からです。しかしHLABでは、高校生の時に参加していただくことを目的としています。その意義とはどのようなものでしょうか。

高田：私たちの定義するリベラルアーツとは、「個々が自身と向き合い、関心を探し、将来を主体的に選択するための最大限のサポートを行えるシステム」つまり、将来の進路

を自ら探し続けていくための仕組みだと考えています。そのために多様な人やモノや学問を学ぶことで自分の将来に気づきを持たせるのです。

高校生の段階で来てもらい、サマースクールといったセミナーを提供することは、彼らが全く興味なかった分野や、学問になりそうにないものが学問になるという面白さに出会うことを目的としています。

例えば、日本の漫画をポップカルチャーとして分析する社会学的セミナーを過去に実施しましたが、こうしたことに高校生が触れることで、「漫画が学問になりうる」という新しい発見が生まれ、自らの進路を探し出すかもしれません。

また東京で行うサマースクールでは、夜に旅館を貸し切って、社会人の人たちにスピーチをしてもらう“フリーインタラクション”というセッションをしています。このセッションでは大学教授からお笑い芸人まで幅広い職業の方をお呼びして、将来の選択肢についてや、自分にとって最良の人生を歩むためには、必ずしも大学で学んだことを職業に活かさなければならぬわけではない、という学びを仕掛けています。そのような、将来を選択する時の下準備が私たちの考えるリベラルアーツです。

小さな成功体験が人を変える

編集部：とても興味深い活動ですが、共同生活に高校生はすぐに馴染めるのでしょうか。

高田：高校生にとって8泊9日、あるいは6泊7日の共同生活をするのは修学旅行よりも長く、なかなかの経験です。また、非日常の空気に圧倒されて戸惑う高校生はたくさんいますし、初日から英語がわからずセミナーに出席しづらくなってしまっている人もいます。

私たち運営やボランティアの大学生がケアも行いますが、一番変化が起きるのは高校生同士の交流です。つまりピアメンタリング（peer mentoring：仲間同士で影響しあうこと）です。仮に英語を話せなくても、英語ができる仲間が手を差し伸べたり、逆に帰国子女で英語はできて議論で上手く意見が出せなければ、そこをフォローするような人が仲間からできてきます。

また、サマースクールに来るような高校生なので、偉い人と喋りたいと思っているガツガツした人もいますが、むしろ、高校生同士が助け合いながら高め合い、身近な人から得る学びの大きさに気づいてもらうことが大切です。

もちろん運営側のフォローもあります。“タレントショー”という催しを設けていて、そこでは歌でもモノマネでも詩の朗読でも、自分のタレントをみせることを披露します。特技がなくても私は出ると言っています。なぜかという、何をやっても絶対にウケる環境ができています。なので、それまであまりついていけなかった人でもステージに立って自信をつけることで、自分を変えるきっかけとなります。

具体的な例を挙げると、英語が苦手ですごく内向的な女の子がいて、なかなか馴染めずにいたんです。

ところが彼女はずっと阿波踊りをやっていたとても上手かった。彼女の強みはまさにそこでしたから、ぜひ阿波踊りを教えてほしいと話しかけ、彼女はそこから一気に周りとの仲良くなりました。その場ですぐに外向的になったわけではありませんが、発言も増えましたし、英語を話そうというチャレンジ精神も芽生えました。そういった小さな成功体験もとても大切です。

そのための8泊9日（または6泊7日）という長期間でもあります。それだけ期間を取ってれば、彼らが変わる瞬間が訪れると信じてプログラムを組んでいます。初日からすぐに仲良くなれる人もいますが、多くの人たちは最初の3日間はガチガチ状態で手探りの人がほとんどです。**編集部：**ちなみに、サマースクールのセッションは英語で行われるのですか。

高田：共通言語は英語です。ただ日本の高校生がマジョリティですから、英語で行うのは全体の半分ほどなのが実際です。参加条件として英語力の高さを問うこともありません。参考としてTOEFL等のスコアは聞きますが、120点であっても参加選考に落ちる人は落ちますし、40点でも受かる人は受かります。

選考の基準は、課題のエッセイで本人のやる気を見ている。エッセイは日本語と英語の両方で書いてもらっていて、英語の文法がポロポロであってもがんばって書いてることが伝わってくれば、私たちも読みたいと思います。

その選択にビジョンはあるか

編集部：高田さんにとっては、HLABの活動そのものが、ご自身が高校生の頃に「こんな体験ができれば良かったな」というものを再現されているように感じているのですが。



高田：まさにその通りで、自分たちが高校時代に欲しかった環境をつくるということが始まりです。今では実際に寮もつくり始めており、中目黒の寮には現在11名入居者がいます。

とはいえそれは後付けの思いであって、自分の高校時代を振り返って正直な話をすれば、実際のところは何も考えていませんでした。私は東京大学と慶應義塾大学医学部に合格しましたが、なぜ医学部を受けたのか、本当に医者になりたいと受けたのか、そのあたりはよく考えていませんでした。つまりビジョンがなかったのです。当時は学校で聞いた医師の話がすごく面白そうに感じたので、一応医学部も視野に入れただけで、その後大学でどれだけ勉強して、何年研修医をして、といったことまでは考えていませんでした。受かってから慌てて高校の先輩に電話して、医学部の現状を聞き、そこまでして医者になりたいのかと初めてそこで考えました。

結果的な進路はどこに行っても良いと思いますが、あらかじめ大学に入る手前で先を考えておくことで、大学に入ってから身の振り方が変わってくると感じます。例えば東大では2年次に進学振り分けがありますが、進学振り分けまでには、残り2年間の学習ビジョンを明確にして

おくことが大事です。もっと言えば、大学入学前から持っていることが理想です。それを考えるためにサマースクールを訪れる人は多いです。そもそも参加しようと思うだけである程度意識は高いのだと思います。

もちろん医者になりたいと思っても、大学に行ってみて全く別のことに目覚めることもあります。ビジョンは変わっていいのです。ただ私たちが学んでほしいと考えているマインドセットは、将来を探し続ける姿勢であり、その上で学びたいことが変わることは極めて自然であり、全く問題ないと考えます。変わるということは、考え続けた結果だからです。

グノーブルで世界の裾野を見た

編集部：高田さんの場合はサマースクールのような経験はされていませんが、グノーブルがありました。グノーブルはリベラルアーツ教育を専門に扱っているわけではありませんが、それに近い学びがあったかと思えます。振り返っていかがですか。

高田：非常に多くを学びました。とくに時事ネタなどが面白く、よく刺激を受けていました。最初の頃は、英語は苦手で、読解の授業で扱う英文を演習時に自分で読んでピンとこないことがよくありました。それでも解説を聞いて楽しんでいましたし、楽しめればそれが自分の教養につながっていきました。

高校生には大学受験がありますから、新たなインプットのほとんどは受験科目の勉強です。それ以外の知識との出会いは自ら情報を得る積極性がない限りは、ほぼないかもしれません。だからこそ、グノーブルのように英語を勉強する中で、新しい世界や考え方との出会いがある授業は貴重です。





たとえばビットコインの文章を読んで、興味が湧いた高校生がビットコインの勉強を始めるかもしれません。限られた科目しか勉強しない中でも、世界の裾野を見せてくれるという意味で、グノーブルの時事ネタや、普段は触れない分野の英文はとても良かったと思っています。

何となく高校時代を過ごしていれば、受験以外の知識を取り入れようという発想はまず生まれません。一般的に学校とは社会から閉じられた空間で、だからこそ生徒は守られているという安心感を持つことができます。しかし学んでいることの先に世界や将来が広がっているという実感を持ちにくい環境でもあるので、そこは外の力を借りて発想を与えることが必要です。グノーブルはそうしたきっかけに満ちていました。

編集部：高田さんはグノーブルで学ばれて、その後グノーブルの英語講師としても働いていましたが、グノーブルの英語教育をどのように感じていましたか。

高田：グノーブルの英語でいつも思い出すのは単語解説です。接頭辞や接尾辞、語幹があって、たとえ見たことのない単語であっても、分解すれば大体の意味がわかるということに、初めは衝撃を受けました。そうやって一つひとつの英単語の表情を意識していればいくらでも覚えることができると感じ、自分でもまとめ

ノートを作ったりしました。

その他では、私が生徒の頃にはなかったEGGSは英語学習のすばらしいきっかけになると思います。EGGSとは文法の基礎講座で中学3年生や高校1・2年生が受講できる、まさに基本の「き」のような講座です。私も中学3年生の頃に受講したかったと思いました。中高一貫校に通っていて、土台が抜けたまま受験勉強に向かう生徒は数多くいると思いますが、そういう勉強では苦労が多いわりに実りは少ないはずで

振り返ると中3の時に、私も中高一貫校の中だるみで全く英語がわからなくなり、グノの先生に泣きついたことがあります。その先生が、後にEGGSのカリキュラムや教材を作った先生でしたが、的確なアドバイスと具体的なやり方を直接教えていただけたので、短期集中で英文法の土台を固めて成績を戻せました。

試行錯誤だった講師時代

編集部：生徒を指導する立場になってみて、気づき、視点が変わったことはありますか。

高田：もともと教えることは好きで、授業をすることそのものに抵抗を感じることもあまりなかったのですが、コミュニケーションをとることの難しさには気づかされました。生徒たちがついて来ているかどうかは最後まで悩みました。添削をすると、ある程度は理解できているかどうかかわかるので、解説する時にどうすれば伝わるのか試行錯誤していました。

一方通行ではないライブ感あふれる授業をしようと思えば、綿密なコミュニケーションをとらねばならず、かつその場で臨機応変に解説をしなくてはなりません。そういったライブな雰囲気教室をつくりだすことも難しいと感じました。

授業が活き活きたものになるに

は、まず、先生として信頼してもらうことが必要です。かといって、友達のようにフレンドリーに接しすぎるのもいけない。とはいつても、生徒はいろいろなことを話してほしいでしょうし、その線引きが難しいと思いました。

いろいろ経験を重ねるにつれ、受験間際の生徒たちを指導しているグノーブルの先生方の大変さはとてもないと改めて気づかされました。**編集部：**受験生の中には、人生がかかっていると考える人もいます。家族の期待もあるでしょうし、学校の期待などもあるでしょう。高校1・2年生と3年生では、教える側の緊張感も違うでしょうね。

高田：グノーブルでは受験生を担当しませんでしたでしたが、かつて、開成の後輩の家庭教師をしていたことがあり、受験生でしたのでとても緊張感を持って担当していました。最後の数ヶ月間はどうかして合格させなければいけないと考えていました。それでも家庭教師は一人にフォーカスして授業をカスタマイズすることができますが、受験クラスの集団授業で、なおかつ、集団でありながら限りなくパーソナライズして授業をすることは相当難しいことだと思います。

英語は必要不可欠のツール

編集部：より高度なレベルになるほど、生徒本人も意識改革が必要になるのではないのでしょうか。

高田：教えてもらうという受動的な姿勢から主体的に学ぶ姿勢への気持ちの変化のことですよね。私自身が英語学習でそれを感じたのは「英語はとても役立つ言語でツールなんだ」と気づいた時です。

趣味でかなりがんばっていたマジックのDVDを見ていて、英語ができれば、もっと深く世界のマジック

技術に触れることができるの、と思ったのがきっかけでした。そこからは、英語に触れることは「勉強」ではなく、自分が欲しい情報を得るために必要不可欠なツールと考えるようになり、英語と向き合う意識もモチベーションも変わりました。つまり、英語は得意不得意の次元ではなく、自分がやりたいことをやるためには、日本語同様、使いこなせて当然の言語だと思うようになったのです。

編集部：目的意識を持って、英語と向き合うと英語との関わり方が変わる。なにか英語を使ってこれを見てみたいということを見つけるとモチベーションも変わる、ということですね。

高田：それが理想です。海外で人と関わるためには英語が話せないと話になりませんし、日本を訪れる海外の人はどんどん増えています。2020年の東京オリンピックも控えています。今の高校生はその時大学生でボランティアもできますから、絶対に英語をやっておいた方がいいでしょう。

若年層に進むグローバル化志向

編集部：高田さんご自身は学生時代、日米学生会議*に参加したり、東大卒業後は外資系のコンサルティング・ファームで働かれたりと、常に隣に英語がある環境だったと思います。そこでお聞きしたいのですが、今の日本はどれくらいグローバル化が進んでいると感じていますか。

高田：先日、米国大使館主催の留学エキスポというアメリカに留学したい人が集うイベントに参加したのですが、集まった人たちの留学への熱意に驚きました。

御茶ノ水ソラシティというカンファレンスホールを貸し切って開催していたのですが、超満員で、中に

は中学生までいました。留学イベントに想像以上の人数が来ていたことが個人的にはとても衝撃的でした。自分が高校生の時は留学するという選択肢すら頭になかった。そういった意味では若年層のグローバル化志向は間違いなく増えてきていると感じます。

編集部：それは何故だと分析されますか。数年前は日本の大学生は留学に興味がない、企業人も外国に行きたくないという人が多いと言われていたはずで。でも今はそういった気運があると。



高田：一つは単純に、世界の大学ランキングで東大の順位が下がったことで、良い教育を受けたいと思うなら海外にも目を向けるようになってきたのではないのでしょうか。

二つ目に、先輩たちが少しずつ海外に行き始めていることに触発され、「あの人が留学を楽しんでいたのだから自分も」という思いもあるのかと感じます。

開成でも4年ほど前にハーバード大学へ進学した後輩がいますが、それをみて自分たちも海外の大学に行けると思った後輩たちが増えて、今年は海外大学に延べ22名合格しています。周囲の少し年上のお兄さん、お姉さんの影響はとても大きいようです。

また先ほども少し触れましたが、

海外からのインバウンドがここ数年で5倍ほどになったと言われてます。中国からだけではなく欧米からも増えてきています。日本が海外に対して開き始めたことによって、若い世代の海外志向が強くなったということはあると思います。

夢中になれるものを持っているか

編集部：ありがとうございます。では、最後の質問になりますが、大人になると若いうちにやっておけば良かったと思うことがたくさんあるものです。まさしくサマースクールのように、大勢の中に身を置く経験があれば、もっと視野や選択肢も広がるでしょう。大学受験の準備に入る前に、何をすべきでしょうか。

高田：何でも良いので、ひとつがんばることです。部活でも、課外活動でも何でも良いです。振り返って自分はあの時、あれだけがんばったと思える経験をするということです。それは集団でも個人でも構いません。ただ強い言うならば、勉強以外のことが良いかもしれません。勉強となると点数が指標となってしまう、人と比べてしまうからです。

失敗しても良いので、何かをがんばって、努力したというプロセスが高校生の頃にひとつでもあると、大学生や社会人になっても、あの時あれだけがんばったからまだやれるという心の拠り所となって背中を支えてくれます。三つ子の魂百までではないですが、若い時代の経験はとても大事で、後々につながります。漫然と学校の授業を受けて、何となく受験勉強をして卒業するだけではもったいないと思いますので、その時に夢中になれることをとことんやってみるといいんじゃないでしょうか。きっと見える世界も変わってくるでしょう。

* Gno-let vol.12「僕らが参加した『日米学生会議』とは」



グノーブル
卒業生
インタビュー

いとう りゅういち
7期生 伊藤 龍一さん
2017年9月司法試験合格
(駒場東邦/東京大学法学部)

今の自分を形成する種のひとつは、
間違いなくグノで植えてもらいました。

法律家として、
幅広く人と関わりたい

この春、東京大学の法学部を卒業して、5月に司法試験を受け、9月12日に合格の通知を受け取りました。12月から司法修習生として1年間の研修を経て、来年の12月から企業法務に強い法律事務所で働き始める予定です。

大学に入った時は法曹と官僚の2つの進路を考えていましたが、結果的には弁護士を選択しました。一般的に弁護士は、訴訟で法廷に出て闘うイメージを持たれがちですが、そ

れ以外にもさまざまな分野で活躍する弁護士がいることを知り、その中で企業法務という分野に興味を持ちました。もちろん企業法務の弁護士も、事後的に紛争になって、企業の代理人として法廷で闘うこともありますが、むしろ、紛争になる前に問題を解決する、そもそも紛争にならないように契約書をつくるなど、人と密接に関わりながら仕事ができるところに魅力を感じたのです。

また、法律家は上述のような人と密接に関わる仕事もできるうえ、分野によっては省庁とも関わり合いを持ち、ルールメイキングに携われる

ような業務もあることを認識しました。このような法律家の可能性の広さを感じたため、結果的に弁護士になろうと決めました。

大学2年から
法律の勉強をスタート

僕の大学生活には3本の軸があって、一つは法律の勉強、二つ目は模擬国連のサークル、そして三つ目はこのグノーブルで英語の講師をやっていたことです。

まず勉強については、1年生の頃はサークル活動中心でしたが、2年

生からダブルスクールを始めて、それからは常に法律のことを念頭に置いて勉強に取り組んできました。ただその頃はまだ官僚も視野に入れていたので“弁護士”という明確な目標を持って勉強していたわけではありません。官僚になるにしても国家公務員試験を法律区分で受けることもできるので、いずれにしても法律を勉強することはプラスになると考えていました。

また、司法試験を受けるには法科大学院に通わなくても法曹を目指す予備試験制度があって、それに大学在学中に合格しようとするなら、大学2年から勉強を始めることが一般的です。それで、僕も勉強をスタートさせたわけです。今年の司法試験は、約6,000人受験者がいて合格者が約1,543人。そのうち一発合格の人が870人と聞いています。

人間関係の在り方に気づいた
模擬国連

二つ目の軸の模擬国連には、かなりのめり込んで活動をしていました。こうしたサークルがあることを知ったのは、東大で配られていたサークル勧誘のビラです。なんだろう？と思って体験会に参加してみて、これは面白そうだと思入会しました。

活動内容を簡単に説明しますと、国際問題（例えば“海賊問題”など）について会議を設定し、そこに各自が各国の大使役として参加して、その国の立場から問題について議論し、決議案まで作成するというものです。日本国内でやる場合は日本人がそれぞれの国の大使役となり日本語で議論しますが、大きな国際大会になれば、各国それぞれの人々（学生）が様々な国の代表として、英語で議論をすることになります。

この活動をやっていて楽しかったことは、国際問題について日本以外

の立場からその問題について考えてみると、実にいろいろな視野があると気づいたことです。またそれを、人と交渉しながら自国の思惑に近づけるよう議論するわけですが、当然、それぞれの国の代表は、自国が持っている方向があるので、最終的には誰もが納得できる落としどころを探さなくてはなりません。

それはディベートのように“論理に勝るものが勝つ”というのではなく、議場にいる人たちが納得できなければ会議として成立しないし、決議が採択されない。そうした議論の交渉性みたいな部分が非常に面白かったです。

ただそれは、活動を通して結果的に感じる事ができた面白さであり、1年生の時は、自分が言っていることの論理が正しいと思込込んでいて、主張し続けるところもありました。いわゆる“論破”に走っていたわけです。ところが、どれだけ強く主張してみても自分の思った通りに会議が進まない。自分の落としどころだと思っていた決議がつかれない。そうした経験をしていく中で、「論理だけじゃだめなんだ」ということに気づいたんです。もちろん自分（自国）の立場もあるので主張すべきところはしますが、引くべきところは引いて、どこを落としどころにすれば良いかを考えた上で、人と話す、議論する。そうしたことを学べたところが大きな収穫でした。

この活動を通して自分自身が変わった部分も多分にあります。以前の僕は、自分が正しいと思って話している時は、自信満々に話すタイプだったと思います。でも、それが上手くない時は、その意見を押し通そうとするのではなく、「このままでは話がまとまらない」と考えて一歩引いて考えられるようになりました。つまり、どれだけ正論を語ろうとも、論理だけでは通用しない、

それが人間関係なのだ学びました。

模擬国連で実感した
英語の必要性

模擬国連の活動を行う上で英語は必須でした。まず必要になるのが日々のリサーチの過程です。日本で会議を行うにしても、国際問題を深く知る上では英語の資料が必要不可欠です。その国がどういう立場にあるかを知るためには、英語を駆使してより深い情報に触れなくてはなりません。

また、議論自体は日本語でしていても、その成果物としての決議書は英語で書きます。ですから、英語がわからないとどうしようもない。自分の論理を立脚させる過程でも、実際の大使がその問題に対して英語で発言したことを読んで、自分なりに把握できていなければ会議でどう振舞っていかかわりません。そのためにも、英語文献にあたらざるを得ないのです。いくら立派な問題意識を持っていても英語がわからなければ議論することができない。これは非常にもったいないことです。

そこで、高校時代にどういった英語を学んできたかが問われます。抵抗感なく文の頭から語順通りに英文を読んで意味がとれるというのは、す





ごく大事なことだと思いました。以前は英語がそこまでできなくても、なんとなくになっていたのかもしれませんが、「これからの時代は英語ができないとダメだ、英語を使わないと自分の思っていることを発信できず可能性が狭くなってしまう」と、事あるごとに周りから言われました。事実そうしたことを模擬国連の活動を通して理解することができましたし、それに相応しい英語学習の必要性も実感することができました。

模擬国連での活動は、英語の必要性について多くの気づきを与えてくれましたが、中でもニューヨークで行われた国際大会に参加した時に、スモールトーク（雑談）の難しさに直面したのは大きなインパクトがありました。

議題のことなら英語ネイティブの

相手とも問題なく会話が成立します。議題についてはこちらも十分調べているからです。ところが、会議が終わって議場を出た途端、ネイティブの人たちは猛烈なスピードで雑談を始め、そのスピードにはなかなかついていけません。結果、ネイティブはネイティブ同士の輪ができ、もう一方で、それに入れなかったネイティブ以外の人たちの輪ができる。そんな現象がありました。このあたりは会話の場数を踏むしかないと思いました。

自分の軸をつくった グノの英語

一方、英語の土台を築く過程においては、グノでの英語学習が圧倒的に役立ちました。英文を読みながら、

次に何が書いてあるかを察知する思考法が自然と身につけていて、読んで理解することに苦労したことはありません。

それは、グノで学んできた英語の学習方法が大変実用的だったことに加えて、大学に入ってから途切れることなくグノで英語の講師として英語に触れていたからだだと思います。

今改めてグノの英語の良さを考えるなら、皆さんおっしゃることかもしれませんが、まず、前から英文を読んで意味を理解するという思考法を自然なものとして身につけられたことが挙げられます。それをより効果的なものとするために音声教材なども完備されている。また、知的好奇心をかきたてられる文章を英語で読むという機会が多く、それについての解説を受けることもできる、とこんなことが挙げられます。

僕はもともと知的好奇心が旺盛な方ですが、グノの授業は毎週、特別にわくわくしながら授業を受けていました。そうした経験の中で、今の自分を形成する種のようなものが植えつけられていたのだと思います。ただ単に英語を学ぶ、受験勉強をするというのではなく、それと同時にグノの英語の独自性でもあるリベラルアーツの要素を含んだ授業を通して、今の自分に通じる軸のようなものをつくってくれたのがグノなのかもしれません。表面的な情報や知識を持っているだけでは教養とは言えません。普段の行動や考え方、人との接し方など、生き方そのものに表れてくるのが教養ではないかと思います。グノの先生方は、教養を身につけた大人として、まさに僕たちのお手本になるような姿勢で指導してくださっていました。

貴重な経験だった グノの英語講師

僕は大学1年の頃から4年生まで、グノで講師を務めさせていただきました。最初にお誘いいただいた時は戸惑いを感じました。ついこの間まで素晴らしい授業を実際に受けていた身だったので、「自分が同じように教えらるのだろうか？」と自信が持てませんでした。高校の先輩でグノで教えられていた方がいらして相談したところ、背中を押してもらえ、ここでしかできない貴重な経験も積めるだろうと思い、お誘いを受けることにしたのです。

実際に生徒さんの前に立つまでは、かなりしっかりとした研修がありました。多くの時間は模擬授業に費やしましたが、模擬授業後の討議では、他の研修生から指摘を受けたことも、自分から発言したことも、指導する側の技量を高める上で大いに役立ちました。

他の先生方の授業を拝見する機会もあり、とても参考になりました。僕がグノで教わった先生は4人で、他の先生方がどのような授業をされているのかわかりませんでした。グノの場合、どの先生に習っても基本的な指導方針は同じですが、やはりそれぞれに個性があります。自分で参考にできそうな部分は貪欲に取り入れて、自分なりの授業スタイルをつくる努力をしました。

高校時代を振り返ってみると、グノの先生方はほんとうに親身になって考えてくださり、準備も万全に整えて授業に臨んでくださいました。僕はその授業を受ける当事者でしたから、先生が一生懸命に教えてくださることのありがたみはよくわかっていました。だからこそ、自分もそうあらねばならないと思っていたので、講師として人一倍努力をして、自分が学んできたことを生徒の皆さん

んに還元できるようにと強く思っていました。

教える立場になって、改めて見えてきたものもあります。僕は大学受験の時には、英文法は必要十分なだけ理解できているつもりでした。ところが、教える立場になってみると、知識が断片的な部分や、成り立ちがわかっていないなど、説明するにあたって大切な部分が抜けていることが顕在化しました。講師になって、改めて英語の基礎を捉え直すこともありました。

また、人に教えるというのは非常に難しいものだと常に思っていました。難しいなりに、自分の経験に照らし合わせて、「僕ならこう解説されるとわかりやすい」という尺度で生徒たちと向き合うようにしていました。教室に“なるほど感”が広がった時はほっとしましたし、やりがいを感じました。自分が高校生の時に感じていた、先生方の授業に対する熱意の源が、少しわかった気がしました。

講師の仕事は、今後の自分の仕事を考えてみても非常に良い経験だっ

たと思います。この4年間英語から離れない機会を頂いたことはもちろん、真剣に打ち込める仕事に携われたこと、とても充実した時間を過ごせたこと、人との接し方をいろいろ学べたことは本当に良かったと思っています。

英語は必要不可欠なツール

大学受験はひとつの目標になることは間違いありません。もちろん、それに向かって勉強することが悪いこととも思いません。ただ、学ぶことは大学受験で終わりではなく、とくに英語は今後の社会で必要不可欠な言語であり、ツールであるということを早いうちから意識してほしいと思います。

大学受験の勉強をしているうちから、英語を使って何かを学ぶという意識を持っていると、実際に英語を使って何かに取り組む時、とてもスムーズに事が運ぶと思います。また、英語を使う機会に尻込みしない自信がついたこともグノで英語を学んで良かった点です。



保護者座談会 2017

生徒に対する愛情と、一人ひとりを見る細やかさ。
子どもを任せて間違いなかった。
その思いは今も変わりません。

◎座談会にご参加いただいた保護者の皆さま：因間 美恵さま 佐藤 緑さま 藤川 千絵さま 三上 由美さま

今年の保護者座談会には、『東大合格特集号』（Gno-let vol.19）にご登場いただいた、因間朱里さん（東京医科歯科大医・桜蔭）、佐藤祐希さん（東大理I・筑波大学附属駒場）、藤川司さん（東大文I・海城）、三上玄さん（東大理I・早稲田）の保護者の皆さまにお集まりいただきました。お話を伺いながら強く思ったことは、子どもの性格を見極めて接することの大切さ、そして、子どもの努力とグノーブルを信じて見守ることの大切さです。それを実践され、ひとつ肩の荷を下ろされた皆さまの座談会レポートをお届けします。（取材・文：吉村高廣）



因間 美恵さま



佐藤 緑さま



藤川 千絵さま



三上 由美さま



因間 朱里さんのお母さま
東京医科歯科大医
1年（桜蔭出身）



佐藤 祐希さんのお母さま
東大理科一類1年
（筑波大学附属駒場出身）



藤川 司さんのお母さま
東大文科一類1年
（海城出身）



三上 玄さんのお母さま
東大理科一類1年
（早稲田出身）

親だから見えていた、わが子の素顔

因間：娘は意志が大変強く、自分で計画して自分ですべて進めていくタイプです。親としては日常的なこと以外ほとんどサポートすることはありませんでした。

相談されるようなことも特になく、習い事も塾も本人の申し出がない限り親から話を持ちかけることもありませんでした。本人から「やりたい」という話があった時には、親の方でもリサーチはして選択肢を増やし、そこから選ばせるようにしていました。ただし、自分でやりたいと言ったのだから、最後までやり通しなさいということだけはいつも言っていました。

中学受験も本人の希望です。いろいろな塾を体験させて、娘が「ここ！」と言ったところにそのまま通わせました。実際に取り組むのは娘なので、自分で納得するところを選ばせることが最良だと考えていました。

佐藤：うちの息子はその逆で、意志の強さや計画性はあまり感じられませんでした。基本的に楽観的なタイプです。でも、結果的にはそれが良かったのかなと思っています。

といいますのも、本人は「自分は理系だ」と言っていたが、肝心の数学が振るわない時期がずっと続いていて、成績を見る限り本当に理系に進めるか不安でした。それでも本人は成績以前に「グノの数学が好きだから」と諦めることなく、また先生方にも可愛がっていただきながら学び続け、楽しく授業に臨んでいたようです。「好き」や「楽しい」に勝るものはないといいますか、そういう蓄積があって理系を諦めることなく勉強を続けることができたのだと感じています。

藤川：うちも佐藤さんのところと同じで、天真爛漫なタイプなのだと思います。自分で決められないわけではないのですが、絶対こうしたいというものもなく、楽な方にと流れていってしまうところがありました。

周りからは「浪人はしないで」と心配されるタイプでした。

グノーブルには中学1年生から英語でお世話になっていましたが、「今日は何割理解できた？」と聞くと、「3割くらいかな」と返ってくる始末。英語は取りこぼしてはいけないという思いが私にはありましたから、息子が理解できていないところは、私が噛み砕いて教えるようにしていました。そんな期間が2年くらい続いたのでしょうか。

数学は中学3年生からお世話になりましたが、櫻田先生、長澤先生からいただいているプリントやノートを見て、息子よりも主人の方が夢中になってしまいました。主人は都立高校で教員をしておりますが、どんどん数学の面白さに引き込まれ、ついには数学の教員免許までとってしまいました。櫻田先生と長澤先生のおかげです（笑）。

話は前後しますが、中学受験の時は、子どもにぴったり合う学校を選ぶことは、親の役目だと思っていま

した。そこに入学できるように、主人が理系、私が文系科目という分担で詰め込むように指導していました。ちょっとフォアグラの製法のような心配もしましたが、受験直前の1月になって、「僕、やっとなる気ができてきた」という前向きな言葉が聞きました（笑）。

三上：うちの息子は、すごく心配性です。その割には、あまり計画性がなく、行き当たりばったりのところもあります。大学選びの時も、文系・理系のこだわりもなく、ただ何となく「東京大学に入りたい」と、比較的早くから口にしていました。

学校の成績は良かったんです。ところが、高校生になって、具体的に受験が見えてきた頃に、「英語がちょっと」と言い始め、それまで通っていた塾からグノーブルに転塾することになりました。そのうちに、他にも課題が見つかってきて、英語に加えて古文でもグノーブルにお世話になりました。

基本的には息子は真面目なんです。

「東京大学に入ったら僕は遊ぶ！」と宣言したことがありましたが、その時ボソッと「でも遊びきれないんだろうな、つい勉強しちゃうんだろうな」ともらすようなところもあって、心配性で真面目なんだけれども、問題が顕在化するまでのんびり構えている。そんなタイプの子ですね。

受験期の子どもの接し方

因間：娘は大きいことも小さいことも気にしない性格で、家で感情的になることはありませんでした。ただ、普段はいつも自分から学校の成績やテストの点数を知らせてくれていた彼女が、「模試の結果が返ってきたんだけど、見せなくてもいい？」と言ったことがありました。

芳しくないのだなと思い、あなたが見せたくないのであればそれで構わないと言いました。それに対して娘は「何とかするから」と言うので、それ以上は詮索せず、そのまま本人

に任せておきました。

受験が終わった後に、その時の点数を見ましたら、さすがにこれは見せられなかっただろうという点数でした。本人も相当ショックだったと思います。きっと、親を心配させないようにしたかったのだろうと思います。

うちには6歳離れた次女がおりまして、長女の大学受験と次女の中学受験が重なっていたんです。私もどちらにもかかりきりになれずにいたところがあったので、彼女なりに気を遣ってくれていたのかなと今は思います。

佐藤：親としては安心するような成績は出ていなかったのですが、息子が勉強のことでナーバスになることはありませんでした。予備校の模試なども3回くらいしか受けていませんし、成績が伸びないことは気にしていないように見えたので、こちらも見守るだけでした。後になって本人に受験期の手応えを聞いたところ、やはり模試の判定は気にして



いなかったらしく、「(合格するか)五分五分だった」という答えが返ってきました。とことん楽観的なのです(笑)。

息子としては、勉強を楽しみながらコツコツやって、グノーブルの先生に質問をして授業を受けていれば大丈夫だろうというスタンスがずっと続いていたようです。

唯一ナーバスになったのは、受験前の12月頃でしょうか。その頃になるともう学校もほとんどなく、グノーブルの授業が少し残っている程度で、友達に会えなくなり、それが非常に辛かったようです。たまたま学校で招集があったり、グノーブルで授業がある時は喜々として過ごしていました。

藤川：息子が壁にぶつかったのは3回あります。中学に入った当初は学校でもグノーブルでも比較的のんびりしていられました。ところが中学2年生になると、学校での順位が100番近く下がり、グノーブルで

も英語の成績が落ちてしまいました。

そこでようやく、何かがいけないと、本人も気づいたようです。ノートは真面目にとっていたのですが、意味を全然理解していなかったことがやっとわかったようでした。そこから授業を受ける姿勢が変わり、成績も上がっていききました。

たぶん中学受験の頃は、授業に真面目に出席していればいいと思っていたのでしょう。さらに親がフォローもしていたので、自分ができると思い込んでいたのかもしれない。

2度目は高校3年生です。そこまではすごく順調に、自分でも面白いように勉強が進んでいたのですが、高3の模試で一度D判定を取ってしまったのです。本人は「問題が合わなかっただけ」と言うので、その問題が本番に出たら怖いよねと言うと、「じゃあ、だめかもしれないじゃないか!」と不安になったようです。その時は少し荒れていましたね。

そして最後がセンター試験の時

す。センター試験本番の国語でマークミスをして15点落としてしまったと報告を受けました。英語でミスを挽回できたと言ってはいましたが、あの15点が命取りになるのではないかとかなり気になっていたようです。

もともとケアレスミスが多い子でしたので、私はその時のミスが、結果的に彼にお灸を据えてくれたのではないかと感じていました。親が何か口出しをする場面ではもうありませんから黙っていましたが、本人もそれに懲りて、ケアレスミスに慎重になったようです。

わが家の基本方針は、息子に合うところであればどの大学でもいいというものでした。息子も最初は別の大学を受けたいと言っていて、そこから東大志望に変えたと聞かされた時は大丈夫?と思いましたが、本人が選んだことですので口出しはせず、ただ見守るだけでした。

三上：息子はとても慎重な性格なので、どんなに模試での手応えがよくても、「それは模試だから」とあまりうれしそうにもしていませんでした。成績が返ってくる頃には、本人はテストのことを話題にすることもなかったのです。こちらは何か言うことはありませんでした。

成績のことを話題にしないのは、学校のお友達の影響も大きかったように思います。成績がいいのが当然だと周りから思われていたらしく、小テストでも、ミスをして周りからいろいろ言われることが嫌いで、弁解もしたくないので、テストの対策はいつも怠っていないようでした。

私としては周りを気にせず、自分は自分でいいじゃないかと思っていましたが、息子にとっての気持ちは、周りが自分のことをどう思うかだったようです。

そんな息子を笑わせることが私の仕事だと思っていて、彼がご機嫌でいられるように、常に明るく、精神

面をサポートしていました。

受験期には、センター利用で早稲田大学の政治経済学部合格していたことがとても心強かったです。東大の試験が終わってから発表があるまでは結果が気かりでしたが、早稲田の政経のおかげで暗くなりすぎずにすみしました。息子も、私が早稲田の合格を喜んでいるのを見て、少しはリラックスできたんじゃないかと思います。

私たちがグノーブルを選んだ理由

三上：中学受験の後、主人がいろいろな塾を調べて、他塾の英語に通いました。広告のうたい文句通りであれば、中学2、3年で『ハリーポッター』の原書が読めるようになるはずでしたが、結果的にわかったことは、大量の読書をしなければ読めるようにはならないということでした。

そして高校生になり、受験を見据えてきちんとした勉強をしなければならぬということ、再度主人が塾を調べ直しました。東大受験は詰め込んだ知識だけでは対応できない部分もあるので、いろいろ調べた結果、グノーブルが良いということになったのです。

藤川：うちは中学受験が終わってから、全く学習塾を調べておりませんでした。そこで同じ中学受験をしたお友達のお兄さんがグノーブルに入っているのを見て、「すごく良い」という評判を聞き迷わず入りました。説明会にも参加しましたが、先生方のお話を伺っていて、「ここなら間違いない」と確信しました。

私どもは夫婦共々、子どもに教える仕事をしておりますので、教えることにどれだけのエネルギーが要るかもよくわかります。グノーブルの先生方の学問に対する好奇心や情熱、

生徒に対する愛情、一人ひとりを見る細やかさが並大抵のものではないことも理解しているつもりです。

教える仕事は、経験を重ねていけば、手を抜くこともできます。しかし、グノーブルの先生方は、一切手を抜くことなく、学びの楽しさや適切なアドバイス、子どもを細やかに見ることに真摯に取り組んでおられます。グノーブルに息子をお任せして間違いなかったという思いは今でも変わりません。

私の場合は音楽の指導をしていますが、先生が楽しそうにしていれば、子どもたちもノッてきて、すごく喰いついてきてくれます。教えてくれる先生の意欲と熱意次第で、学ぶ側の意欲は大きく変わります。私も指導していて授業が延びてしまうことがあります。授業の延長は、教える側にも学ぶ側にも、とてもエネルギーが要ることですが、いい授業が実現できている時は、子どもたちも

目をキラキラさせてついてきてくれるのです。

グノーブルが、「今日はここまで」と時間通りに授業を終わらせないのは、先生方ご自身の情熱と、生徒たちの意欲があってできることだと実感としてわかります。

息子が遅くまで教えていただいている時は、主人と2人で、こんなにありがたいことはない、いつも話しておりました。息子にも「ここまでしてくださる大人に会えることは本当に幸運なことだから、この6年間をありがたいと思って学びなさい」と言っていました。

因問：中学の頃は、学校の勉強をちゃんとやりたいということで、全く塾に通っていませんでした。中2から英語の成績が伸び始め、「もっと伸ばしたい」という話がいつか本人から出てくるだろうと思っていたため、こっそり英語の塾の情報を集めていました。そして、中3の3学



期に、「高校生になったらもっと英語を深く学びたい」と娘から言い出したのです。

私の中では、先生との距離が近いことや、受験のみならず将来も使える英語を学べるグノーブルが良い、という印象をすでに持っていたんです。ただ本人が持ってきたパンフレットは違う塾のものでした。本人の考えを否定するわけにもいかず、「この塾の春期講習も受けてきなさい。けれど私はグノーブルも良いと思うからここも受けてきなさい」と言って、グノーブルを1つの選択肢として与えました。春期講習が終わった後に、「私が通いたいのはグノーブル」と本人がグノーブルへの入塾を決めました。

佐藤：うちは中学2年生の時にまず英語で入塾しました。きっかけは、知り合いに塾について相談をしたところグノーブルのことを教えていただいたことです。その後、ネットで

大学受験塾をいろいろ調べてみて、改めて「良さそうだ」と思いグノーブルに決めました。

中学に入学した頃は、息子の通う学校は中高一貫校でしたから、中学時代は塾とは無縁だと思っていたんです。しかし実際は、多くのお子さんが塾に通っていると聞いて驚きました。実際、学校の勉強だけではほとんど英語力が向上せず、本人も「塾を探さなければ」と思っていたようです。

多くの同級生は、東大専門塾に行っていたのですが、そこは宿題がとて多く、易きに流れる性格の息子です。宿題も写させてもらう側になってしまうと思い、他の塾を探したんです(笑)。

グノーブルに入ってからは楽しんで勉強していましたが、親としては英語が中2、中3と伸び悩んでいたことから、通塾を続けるか少し考えていた時期がありました。高1

の時、「グノーブルが考えている大学受験」といった内容の学習講演会の案内をいただきまして、それまで子どもの勉強に細かくタッチしてなかった主人が、「しっかり聞いてくる」と言って参加したんです。帰宅後に開口一番、「ここでがんばっていけば間違いないだろう」と。という先生方が、どういった方針で授業をやっておられるのかがよくわかり大いに共感したようです。

子どもの様子から垣間見えたグノーブル

三上：グノーブルの授業が延びても、息子には気にならなかったようです。この経験は息子に大事な気づきを与えたと思います。彼は今、大学に入って、様々な才能に囲まれて、いろいろなものを一生懸命に勉強したいと感じているところです。「夢中になれるものには時間を忘れて取り組める」ということを、グノーブルで学べたことは大きな財産になっていると思います。

息子が授業を楽しむことができたのは、なんとといっても、先生ご自身が英語が好きで、それを生徒に教えることも楽しんでおられた、そんな気持ちが彼にも伝わったから授業も楽しかったのでしょう。そんな思いを共有したくて、息子はグノーブルを一生懸命同級生に勧めて広めようとしていたようです。

また息子は、毎朝時間を決めて音読をしていました。それは義務感からではなく、声に出す英語が楽しかったからだと思います。歌を歌うように英語を声に出して読んでいました。その姿は本当に楽しそうでした。

藤川：自ら学ぶことを教えていただいた6年間でした。成績が高2で落ちた時も、本人の学び方に100%問題があることはわかっていたので、

グノーブルに対して不安はありませんでした。

むしろその時にグノーブルの先生に勉強の仕方について相談をさせていただいて、音読の大切さに気づかせていただいたようです。そこからは東大の試験の前日まで、夜の30分を音読に充てるようになりました。

まずは自分でやってみて、何かあったら先生に質問に行く。自分のやり方を見直して改善につなげる。先生を信頼できたからこそ、主体的な姿勢が育まれたのだと思います。

因問：娘はグノーブルから帰ってきた後はいつも興奮状態で、授業がどれだけ楽しかったのかを熱く話してくれました。その姿は、英語の勉強に行っているのではなく、英文で教養を身につけているという印象が非常に強かったです。

実は高1の時、グノーブルの初回授業で、人生初の0点を取り、愕然とした顔をして帰ってきたことがあります。すごくショックだったようです。でも、課題が見つかることは成長のきっかけになります。「この塾でがんばりたい!」と強く思ったようです。

「合格者の声」に本人もその時の思いを書いていて、その後はグノーブルの英語をしっかりとやるのが、彼女の中で最も重要なことになり、復習を必ずして、先生についていくことに必死だったようです。

高1、高2で関田先生に英語の土台を作っただけ、高3で中山先生にさらに大きく伸ばしていただき、英語が“得意な教科”から“大好きな言葉”に変わったとも表現していました。

また、受験テクニックを身につけるということではなく、教養を身につけ、語学の楽しさがわかる授業を受けられたので、大学でも第二外国語がとて面白いそうです。ただ、英語の授業は今でもグノーブルに通い続



けたいと娘は何度も言っています。

当初彼女にとって、英文を英文のまま理解するという事は、ほんやりしたイメージでしかなかったようですが、日本語に訳してしまうとニュアンスが変わってしまう部分をそのまま解釈することの大切さは、今になって活かされているようです。本当にレベルが高い指導をしていただけたのだと親として感謝しています。

佐藤：授業が本当に楽しいということは、迎えに行った帰りの車の中で、うちの息子も興奮醒めやらぬ状態で話してくれていました。それは私にとって、とてもうれしいことでした。受験は辛いイメージがありますが、「楽しい!」という熱量のおかげで息切れせずに最後まで、知的好奇心に押されるように走り続けることができたのだと思います。

因問：本当にそうですね。受験のための塾なのに活き活きと通っている娘の姿を見たり、話を聞いたりすることが私にも非常にうれしかったです。

佐藤：数学では“セルフチェックシート”というものに息子なりに真面目に取り組んでいて、書くことで自分を分析したり、反省したり、今後の計画を立てたりと、息子が自分で判断して、自分の足で歩けるように育てていただけました。

藤川：主人とは数学のことで話が弾んでいましたが、息子は私にはあまり具体的なことは話してくれませんでした。それでも、息子がグノーブルで大事なことを学ばせていただいていると感じていました。普段ニュースを見ていて「これはこの前グノの英文で出てきた」と、ポロッとよんだり、何気ない会話の中で息子の興味が広がっているのを感じる事がよくありました。グノーブルでの受験勉強は世の中に開かれていたようで、息子の視野も多角的に広がっていったと思います。

アウトプットもできるようになりました。つい最近も、東大でスポーツ科学の論文を書いており、それを





見て文章の変化を再確認いたしました。読み手が腑に落ちるような文章を、難しい言葉を使わずシンプルに組み立てておりました、それはグノーブルで高度な表現力を学んできた結果なのだろうと感じました。

三上：うちの息子も喜んで通っていました。見た目のイメージと違い、息子は案外話し好きで、帰ってきてからずっと授業で学んできたことを話していました。私としてはとてもうれしかったです。

今は東大で論文を書いているのですが、それを英文で書かなければいけない場合もハードルは高くないようです。日本語を書くように英文で書いているのを見て、随分英語を使いこなせるようになってきたと感じました。グノーブルで学んだ英語力が今に活かしていることを見せてもらい、とても感謝しています。

親の立場で先生方に思うこと

三上：グノーブルで英語を学び、世界中の情勢や報道を英語でわかるようになり、“生きた英語”“深い教養”を身につけさせていただけると、本人は感じているようです。

それは、毎年同じような内容のテキストを使い回しするのではなく、先生方ご自身が妥協することなく、常に“今”を見つめてブラッシュアップした教材があるからこそ。そこに加えて、先生ご自身に伝えたい思いがあるからなのだろうと思います。



藤川：息子に一番適したタイミングで、最も適したものを教えてください、学ぶこと全般についての本物の師であると感じています。

思春期の子どもは親の言うことはあまり聞きません。むしろマイナスに捉えて逆方向にいつてしまうこと

もあると思うのですが、そこはグノーブルの先生に正しく導いていただきました。

三上さんもおっしゃっていましたが、授業内容についても、先生方が常に勉強されていることがよくわかる内容で、それをどうしても伝えたいという思いが、息子にも伝わっていたのだらうと思います。

息子は通塾した6年間で、グノーブルの半数以上の先生から教えていただきました。この座談会に参加するにあたって、どの先生が特に良かったか息子に聞いたのですが、「どの先生も素晴らしかった」とはっきり答えが返ってきました。グノーブルという塾の文化・伝統というものがあるのでしょうか。これは素晴らしいことだと思います。

因問：この先生について行きたい！という娘の思いを垣間見ることが多々ありました。教養豊かでカリスマ性のある先生がたくさんいらして、これは単なる受験英語を学びに行っているのではないと私も感じていました。グノーブルの先生に教わってれば間違いないという娘の安心感が、私にも伝わってきていました。

また医学部受験では、自然科学系の文章の出題が多いのですが、そういった長文も非常に多く与えていただき、本人も面接や小論文に至るまで、グノーブルのおかげで思考の引き出しが増えたと申しておりました。

「勉強ができるだけではダメです」という先生の一言が娘には印象深く残っているらしく、医学部に進み臨床医を目指しておりますが、先生のようにいろいろな教養を身につけて、人間力も養っていかなければならないと感じているようです。親として大変感謝しております。

佐藤：環境づくりにも感謝しています。予備校のような何百人というような環境ではなく、かといって個別指導とは違って競争意識というもの

もグノーブルにはあります。これは受験生にとって非常に大きなことではないでしょうか。

グノーブルの物理クラスのメンバーとは今でも非常に仲が良く、受験期から、試験対策などを相談しながら決めていたようです。まぎれもなく大学受験を前提とした塾でありながら、深く交わる仲間ができる。そういった環境であったこともとてもありがたかったです。

お子さんが受験を迎える方に

藤川：大学選びには、ご家庭それぞれの考えがあると思いますが、音楽を通してたくさんのお子さんをみさせていただいている私としては、一人ひとりの子が自分で最良のものを選び取れる力を持てるように、大人が子どもを信頼して育てていくこと、そして、本人の選択を尊重することはとても大事だと考えています。

子どもはまだ視野が狭いので、時に崖っぷちに立たされた気持ちになることもあります。そこで少し違った視点を持てるようにすることが親の役目なのかなと思います。

子どものことを一番よくわかっているのは親です。子どものすべてを受け止め、その子が自分の推進力で進めるようにするサポート役になればいいと思います。無理やり背中を押しても子どもは絶対に前にいきません。成功も失敗もすべて自分の責任のもと、自分の力で選んで進んだ結果の賜物だと思えるような大人の支えが大事です。

三上：私がいつも口にすることは“元気が一番”です。息子が元気でいてくれて、たまに笑顔でも見せてくれたらそれで私は十分でした。

大学受験も私にとってはオプションにすぎません。それがすべてではないですし、いろいろなことがある人生の中の選択肢の1つでしかない



と思っています。志望する大学を選ぶにしても、ブランドにとらわれず、好きどころがあればそこを目指せば良いですし、仮に大学受験が上手くいかなくても、元気でいてくれればそれでいいと思っています。そして、元気でいればこそ、より良い大学受験ができるのではないのでしょうか。母親としては、その子が人生を楽しめるよう導いてあげるのが良いと思います。

佐藤：結果を急がないことが大切だと思います。私自身、息子のあまりの呑気に不安を感じた時もありま

したが、グノーブルで大変楽しく勉強させていただいておりましたので、結果はついてくると信じていました。

うちは娘が最近グノーブルにお世話になりはじめました。それは息子が自信を持ってグノーブルを勤めてくれたからです。子どもが楽しく授業を受けている様子が感じられるようであれば、焦らずドンと構えていて大丈夫だと思います。

因問：私も親が後ろから見守っていれば良いと思います。本人が進みたい方向であったり、やりたいことであったり、自分で将来のビジョンを描いているところに、親がいろいろとアドバイスをしようにしても、それが結果的に方向性を歪めてしまうこともあります。

あまり大人が口出しせず、子ども自身が、今後どういったことをやっていきたいのか考えられるような環境を作ること。本人の視野が狭くならないように選択肢は与えつつ、本人の意見を尊重して、自分で選んだ道に、自信をつけさせてあげることが大切だと考えます。

そして親は、子どもの年齢が上がるとつれて、徐々に後ろに下がりがりながらサポートすることが良いと思います。



東京大学トライリンガル・プログラム (TLP) 選抜者インタビュー

グノーブルでの学びを土台に、より広い視野で世界に羽ばたく。

国際化が言われる現在、大学生活における外国語の習得が、学生たちの将来を左右する要因のひとつになることは間違いありません。東京大学では2013年度より、高度な英語力に加えて、もうひとつの外国語の運用能力を集中的に鍛えていくTLP(トライリンガル・プログラム)制度が設けられています。TLPの履修条件は、大学受験の2次試験における英語の成績が上位1割程度と極めて狭き門。グノーブルからは毎年数名の卒業生が選抜されています。そこで今回は、10期生からの選抜者である小森優真さん(理Ⅱ・開成)と、今春選抜された11期生・小田麻優子さん(文Ⅰ・鷗友学園女子)をお招きして、TLPのこと、グノーブルのことについてお聞きしました。



語学において、 定着率を上げるには、 常にアウトプット していることが大切です。

こもり ゆうま
小森 優真さん
東大理科二類2年(開成)

TLPに選抜され中国語を選択

東大の英語の得点は91点でした。自分では満足できる点数ではありませんでしたが、幸いにしてTLPに選ばれました。僕らの代から履修言語の選択肢の幅が広がり、以前からの中国語に加えて、ドイツ語、フランス語、ロシア語が選択できるようになりました。僕が選択したのは中国語です。

TLPで中国語を選択すると、必修の週2コマに加えて、文系の学生は週3コマ、理系の学生なら週2コマ授業を多くとることになります。大雑把に授業内容を説明しますと、ひとつはリスニングの能力を鍛える授業、もうひとつは先生やクラスメイトと話すことで会話能力を高める授業です。2年生からは、一般の学生は外国語の必修がなくなりますが、

TLPの学生は週に2コマTLP用の授業をとり続けることになります。その時は、作文、読解、会話の中から2つ選ぶことになります。

TLPは前期と後期に分かれていて、前期の1年半を修了して、さらに希望すれば後期も引き続き履修することができますが、専門の勉強が忙しくなるため後期もTLPを学び続ける人はかなり減る傾向にあるようです。

習熟度は人それぞれですが、中には非常に優秀な人もいて、TLPで初めて中国語を学び、今年から北京大学に留学する人もいます。僕の場合は前期の1年半で、中国人とある程度の日常会話くらいはできるようになりました。中国語は、発音が難しいのと、漢字が日本語と混ざってしまう点が大変ですが、文法自体はそこまで難しくないと印象です。

言語学習の基本は 音を聞くこと

大学に入るまでは英語が唯一の“外国語”でした。大学に入って新しい言語として中国語に触れたわけですが、言語を学ぶ基本は、“音を中心に据えること”ということを再確認しました。特に中国語は、見た文字と発音がなかなか結びつきにくい言語ですので、目で文字を追っているだけでは習得できません。もし人と会話することまでを念頭に置いて学習するなら、音声を聞いて耳を鍛えることが大切です。このことは英語の学習でも当てはまりますし、音の大切さはグノでも頻繁に強調されている通りです。

英語と異なる点としては、英語の場合は動詞の形が現在形や過去形と変わりますが、中国語はそうした変

化がなく、その点においては学びやすい言語だと言えます。僕ら日本人も日常的に漢字を使っているのではなじみやすいという点も挙げられます。ただし、中国語の漢字と日本語の漢字では字形が異なったり、同じ熟語でも日本語と中国語とでは意味がまるで違う場合もあるのです。例えば中国語の「老婆」は「妻」という意味だったり、「工作」は「働く」ことを指したりと違いはたくさんあります。ですから、予め自分の中にある“言葉に対する先入観”のようなものをリセットしておかないと正しく理解できないこともありました。

僕は中国語を学ぶ上でも、グノで学んだ通りに教科書の音読は欠かしませんでした。繰り返しになりますが、言語を学ぶポイントは“音”だと思います。それは聞くことしかり、自分で発音することしかりです。黙読だけでは、読み書きの能力を上げることも難しいのではないのでしょうか。

グノでの6年間の勉強

中1(スタートダッシュ講座)からグノでお世話になっていますから、僕の場合はグノでの勉強方法が始めから基準になりました。そのやり方を使って学校でも学んでいましたし、学校で用意された音声教材も、当たり前ものとして受け入れられたのでうまく活用できていたと思います。英単語をどんどん覚えていくことを含めて、英語の勉強が楽しくないと感じたことは一度もありませんでした。

グノと学校で学び方がかなり違うと意識し始めたのは、高校生になってからです。当時は、実力が着実に付いていると自覚していたわけではありませんが、振り返ってみれば、グノでの指導を通して英語をその語順のまま処理できるようになり、また語源を大切にすると単語の習得法を通し

て、飛躍的に語彙力も伸ばせたと思います。英語に関しては、高校時代を通してずっと安定して成績も良く、受験を視野に入れても早いうちから武器になると確信できていました。

東大の入試では、読む、書く、聞くの3技能がバランス良く問われていると思います。個人的には、読む、聞く、書くの順番で得意になりました。

英語に触れたのはスタートダッシュ講座が初めてでしたが、中学生のうちに積極的に児童文学を英語で読んだり、英字新聞を読んだりしていました。読むことに抵抗を感じないだけの土台ができていたので、「原文でこれを読んでみたい」という欲求が湧いて主体的に取り組むことができ、どんどん読みながら力を伸ばせたのだと思います。

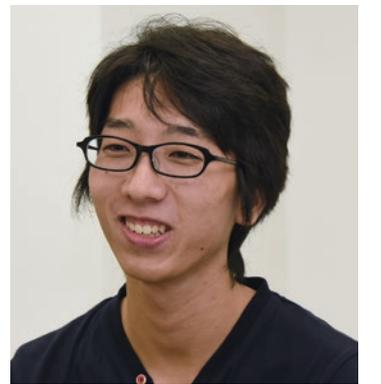
英語のまま読めるようになれば、聞くことへの抵抗もなくなっていきます。頭の中で日本語に訳しながらだとすぐに限界が訪れますが、読む時に英語のまま解釈できていれば、英語の音に耳を慣らせさえすれば、聞いても解釈できます。グノにはすべての授業に対応した音声教材がありますから、英語の音に触れることを習慣化するのは簡単でした。

逆に苦手意識がなかなか抜けなかったのは書くことです。インプットが先で、その経験を重ねるとアウトプットができるようになるわけですから当然のことかもしれませんが、自然な文章を自由に書くことがなかなかできるようにはなりません。でもグノの場合、特に受験学年では毎回かなりの量の英作文をして添削を受けられます。最初は英文の組み立て方のような大きな点も指摘されていました。細かいところの指摘を受けるのは最後までよくありましたが、大量に書いて添削を受けられたのはとても恵まれた経験だったと思います。

それぞれの技能を伸ばすために特別苦勞をしたかという点、そうでもなく、やっていたことと言えば、グノの勉強をただ楽しく継続していただけでした。僕にとって最も大事なことは授業でした。よく、「ここはわかっているから聞かなくていいや」という人がいますが、僕はいつも一番前に陣取ってしっかり授業を聞いていました。というのも、グノの授業は堅苦しく“勉強をやる”という感じではなく、先生が話されることが純粋に楽しかったからです。特に読解の授業については、読んでいる英文の内容しかり、先生が話してくださる内容しかり、自分の知的好奇心を満たしてくれる新しい発見の連続でした。授業をしっかり聞いていけば、プリントやノートを復習するのも楽しめますから、僕がやっていたことは、楽しいことを繰り返していただけた(笑)。

一方、作文の授業については、「もっと自由に書けるようになりたい」という意識があったので、こんな言い回しがある、こういう書き方がある、ということをお貪りに吸収しようという気持ちで授業に臨んでいました。授業中だけでなく、返ってきた添削を見て自分の中に取り入れるべきものはすべて頭に入れてしまつつもりで取り組みました。

読解は、英文を読み返しながらか授業を思い返すのと要約の音声を聞き



ながらシャドーイングするのが主な復習方法。作文は返却された添削をじっくり見返して、しばらく日を置いてからもう一度書き直してみるという復習方法でした。

中国語をやっていると思うのですが、語学は常にアウトプットしていると定着率が上がります。覚えたりもりでも放っておくと、語彙も抜けていってすぐに出てこなくなるし、複雑なことを組み立てる構文力も普段から少しでもアウトプットしていないと身につけません。いつも使うようにすればスムーズに出てくるようになるので、日頃から自分で書いてみたり、言ってみたりして実際に使えるようにレベルを高めていく必要があると思います。

大学受験の英数国に関しては、今振り返ってもグノで習うことだけやっていれば十分な手応えを感じていました。自分で特別な計画は立てませんでした。高2の時点で特に試験などで困ることはなく、あまり心配せずに過ごせたので、他の科目に力を注ぐことができました。高2の終わりくらいでこれらの主要科目がおぼつかないようだとかかなり精神的にもきついかもしれません。

英語の勉強法

グノのノートは中学生の時のものから捨てずに残してあります。僕の場合はノートに書き残した方が頭に残りやすかったので、自分が知らなかった単語や熟語、文法事項など、初めて知ったことはもれなくノートに書くようにしていました。中学生の頃も、英語という新しい言葉を身につけていくのが新鮮だったので喜んで書いていたのだと思います。高校生になっても単語の語根や成り立ちなど、細かなことも逐一書き写していました。この作業は習慣化されていましたからめんどろうだと思った

ことはありませんし、語源や成り立ちまでメモするのはむしろ楽しい作業でした。

一方プリントには、段落のつながり、文の前後のつながりなど、文全体の構成や筆者の主張などを理解する上で大事なことを書きとめていました。英文についての背景なども書き残して、復習に役立てていました。復習の中心は音読やシャドーイングで、これだけは毎日欠かさずやっていたのですが、これ以外に「特別にこれをやった」というものはありません。グノで学んでいる限り、音読やシャドーイングは特別なことではありませんね。逆に言うと、これだけで東大合格に十分な英語力がついたということになると思います。センター試験の模試を初めて受けたのは高1の秋頃ですが、成績優秀者に選ばれていたのが、たぶんその頃から英語はできていたんだと思います。グノでは中学生のうちに基礎的な文法項目を音声教材を聞きながら自然と頭に入れられるようになっていたので、学校の試験やセンター試験の問題で苦労することはまったくなかったのだと思います。



また音声教材をやり続けていれば、英語を前から理解していくという力が自然に養われます。言語習得にはその言葉のリズムも大切ですが、そ

れも音声教材で身につきます。リズムをつかんでしまうと英語を返り読みして理解するというのが逆にわかりづらくなります。ですから、構文解析をして後ろから振り返って英文を説明する授業を受けると本当にわかりにくかったです。

テクニックより英語感覚が大切

グノで6年間学んできた僕が、語学で一番大事かもしれないと思う点は、「語順や論理の展開などは、その言語を母語とする人たちの感覚に合わせてなければならない」ということです。つまり、読む時も聞く時も、そして書く時や話す時にはなおさら、なるべく日本語は使わずに、その言葉だけで処理していけるようにするということです。

新しい言語を身につけていくのは、始めは不自由ですが、だんだんと今までは違う自分が成長していくような感覚があり、楽しいものです。新しい言葉を学ぶと、新しいものの見方や考え方がわかってきますし、それは自分の幅を広げてくれます。そういうことが非常に面白くて、大学2年の夏学期もアラビア語をとっていました。

大学受験で英語を勉強する時も、英語のまま読んだり聞いたり書けたりするようになれば、小手先のテクニックに頼る必要はまったくありません。特に大切なのは、読解やリスニングで学んだ表現を実際に自分で使って書いてみるのだと思います。どんどん使っていると成績もどんどん伸びます。

今ならチャットとか、いろいろな方法があると思いますから、自分で使う機会を増やしていく努力が大事だと思います。それは英語でも中国語でもアラビア語でも、どんな言語でも同じです。

中国語を学ぶ上でも、グノで学んだ通りに音読をやっています。

おだまゆこ
小田 麻優子さん

東大文科一類1年（鷗友学園女子）



TLPで中国語を集中的に学習

東大入試の英語は98点で、目標にしていたTLPにも選ばれました。TLPでは中国語を選択しました。実は小3までの5年間シンガポールに住んでいたため中国語にはなじみやすい印象を持っていたんです。中国語の他にも、ドイツ語、フランス語、ロシア語の選択肢があって「ロシア語もいいかな?」と迷いましたが、やはり小さい頃に使ったことのある言語に愛着があり、中国語を選びました。

中国語は発音が難解なので、週5回の授業のうち最初の数か月は徹底的に発音を学びます。その後、会話、読解、作文、文法などを学んでいくわけですが、私はどうも文法の勉強が苦手です。小学3年生まで海外で過ごしていたため、言葉を学ぶ上で「文法として勉強する」という概念がありません。ですから、中国語の文法はさほど難しくないとされるのですが、私にとっては結構高いハードルです。

TLPは1年半集中的に選択言語を学び、ある程度その言葉を運用できるようにするプログラムですが、1年半で言語を習得するのは困難だと思います。とはいえ、この数か月間でも徐々に聞くことはできるよう

になってきていて、中国人同士が会話しているのを聞いても一応単語は拾えるくらいにはなりました。

中国語でグノの学習法を実践

中国語には4つの“声調”があり、この発音や聞き取りが特に難しいポイントと言われます。英語も同じですが、言語の発音に慣れるためには、徹底的に聞き込むことと、それと同じくらい声に出すことも大事です。自分で勉強する時は、中国語の音声聞いて発音すると、その声調を検証してくれるアプリケーションをスマートフォンに入れて使っています。中国語を勉強する上でのアプリケーションは結構充実していて、このあたりにも、日本における話者の多さと言語としての重要性を感じられます。

また、グノで英語を学んできたやり方を、今の中国語の勉強にも応用しています。グノでは、英語を英語のまま理解していくやり方で習いましたが、それを中国語にも活かしているのです。中国語を頭の中でいったん日本語に置き換えて意味をとっていくというやり方でなく、中国語のまま読みこなせるように習慣づけています。

私は帰国生ということもあって、

英語については文頭から読みこなして意味をとっていくのは普通のことでした。ところが中国語という新しい言語を学ぶようになって、グノの学習法が「こういうことだったんだ」と初めて実感できました。単語の理解度にしても、文章の中でその意味を理解していくのと、単語を単体で暗記するのでは鮮度も精度も違います。

せっかくTLPに選ばれて、集中的に中国語を学ぶ機会を得たわけですから、少なくとも普通に話せるようにはなりたいと思っています。前期TLPの1年半を終えると、それ以降は専門の勉強が忙しくなるため後期TLPをとらない人も多いようですが、私は後期もTLPはとっていきたくと思っています。世界の共通語である英語はもちろんですが、これから中国語は、より必要性の高い言語になるはずですし、絶対に将来活かせると思います。この機会を活かして、基礎固めはしっかりしておきたいと思っています。

帰国生の壁になる大人の英語

東大入試の英語では、読む、聞く、書く、の3つの力が問われますが、自分の中で特に自信があったのはリスニングです。受験前はネットでBBCのニュースを聞くようにして



いました。東大のリスニングはセンター試験と比べるとかなり早口です。しかし、ニュースの方がさらに早いので耳を慣らすためにもニュースを聞くのは良い訓練になりました。

私は学校の英語で苦勞することはありませんでした。ただ、東大を目指すと思うと、いくら英語が得意といっても事情が違ってきます。中でも、一番難しいと思ったのは要約です。英文を読むことと、主旨をちゃんと把握して要約することは別の作業です。まして、英文の内容が難しくなると、英語のままでは理解しきれないことも、グノではよく経験しました。帰国生とはいえ小3までの英語ですから、自分の持っている英語の語彙や論理力では大人の英語に対処しきれなくなっていたのです。添削の点数も何週も続けて低いままになりました。その頃は、授業ではなるべく前の方の席に座って先生の解説を誰よりも深く理解するつもりでいました。

でも、難しいことを乗り越えそううれしいことが待っています。難度の高い英文が理解できて、主旨をしっかりとめられるようになると、自分の思考の幅が広がったのを実感できるようになりました。新しい地平が開けて世界が広がった感覚です。苦勞した要約のプリントの中には大

好きになって宝物になったものもあります。そういうものは今でも残っていて時折読み返しています。グノレベルの要約は本当に難しいですが、それができるようになれば国語力も論理力も上がると思います。

グノの「お帰り問題」でも苦勞を味わったことがありました。最初の頃はディクテーションだったので、そこは得意分野でした。でも深い読み取りが必要になる読解問題が「お帰り問題」になると、必ずしも周りの人より早く解き終わるとは限らなくなりました。直面していたのは語彙力不足でした。私は語彙に関しては人並みより少なかったのだと思います。流れの中で語意がつかめる時はいいのですが、そうでないと先に進めなくなってしまい早く帰れないこともありました。

その語彙力不足は、グノで教えていただいた方法で乗り越えました。語彙を増やすという意味でも、推測力を鍛えるという意味でも、語源から単語を覚えていくグノのやり方はとても役に立ちました。

また、文法についても帰国生特有の弱点がありました。会話では使えるけれど書き言葉としては正式でないものが、私の中では「正しいもの」になってしまっていたのです。例えば、「should have / シュッド・ハ

ブ」を省略して「should've / シュダブ」と言いますが、私は「シュダブ」が書き言葉としても正式な英語だと思っていました。つまり私は音で英語を覚えていたんです。

また、人が使うのを聞いたことがあったり、自分でも使ったことがある表現は理解できて、複雑な文章に出くわすと途端にわからなくなることもありました。体系的な英文法が身につけていなかったため、グノのテキストの前の方にまとめられている、その文法単元の例文を、その文章丸ごと覚えてしまうようになっていました。

振り返ってみても、グノの授業は本当に楽しかったです。入試問題より難しい英文もたくさんありましたが、解説がすばらしくて内容の深いところまで理解できました。帰国生の私にも課題がたくさん見つかって、ある意味ではピンパン鍛えられてやりがいがありました。グノでがんばっていたおかげで、東大入試本番の時はスラスラ英語が読めているのを実感していました。

グノの英語が懐かしい

東大では、理系の学生を対象とした ALESS^{*1}と、文系の学生を対象とした ALESA^{*2}という英語の授業があります。ALESA では、英語で論文を執筆し、それを元にしてプレゼンテーションやディスカッションのやり方を学びます。学術的な英語について学ぶことが多く、やりがいもあって面白い授業でした。

でも、それ以外の英語の授業は正直なところあまりピンときていません。英語のクラスは G1、G2、G3 と3つに分かれていて、G1 は入試の成績が上から 1 割の人。つまり TLP の該当者です。G2 が 6 割。G3 が残りの 3 割ということになっています。ただし、このクラス分けには

あまり意味を感じていません。使うテキストも同じですし、テストも同じだからです。教科書に出てくる英文も少し古くて、載っている文章にも必ずしも興味が持てるわけではありません。

そんなふうに感じてしまうのは、きっとグノの英語と比べてしまうからだと思います。私はグノの文章が大好きでした。新しい情報もどんどん読めましたし、多くの発見や気づきもありました。東大の入試問題は結構面白い内容だったので、グノに似たものを感じて期待していたんです。ところが、実際の授業には少しがっかりしました。興味が持てなければどんな科目でも取り組む意欲が湧きません。ですから、東大に入学しても、ただ漫然と授業を受けていただけでは英語力を伸ばすことはできないと思います。もし社会に出て英語を武器にしていこうと思ったら、授業以外にも主体的に英語に取り組んでいかないと難しいのではないのでしょうか。私個人で言えば、あまり専門的な用語が入っていない学術書を読むようにしていますが、「楽しい!」と思えることはなかなかありません。グノの授業がつくづく懐かしく、今でも受けたいと思います。

大切なのは主体的な姿勢の確立

高1の頃は、英文法の土台を固めるためにノートをきちんととっていました。単語についても体系立ててまとめるために、語幹を中心としたカードを作っていました。自分なりに基礎を固めることができたと思えたのは高2くらいからで、授業中に大切なことをプリントに書き込んでいくスタイルに変えていきました。特に、「どこがメインパラグラフなのか、トピックセンテンスはどの文で、そこを説明している部分はどこ

か」などはプリントに直接書き込む方が圧倒的に簡単でした。グノでは英文プリントは2枚ずつ配られ、1枚にたくさん書き込みをしても、書き込みのないもう一方で復習できるようにしていたので、そのやり方が推奨されていたのだと思います。

日常的な英語の復習としては、グノのプリントの音読を中心としていました。まずスラスラ音読するための準備として、プリントに書き込んだことをよく理解し、辞書をこまめに引いて疑問点は解消していました。その後、最初の数回は書き込みのあるプリントを見ながら音読して、それから、何も書いていないプリントを使って、内容をしっかり意識しながら音読をしていました。

英作文の練習をする場合は、まずは下書きをしてから実際に書いてみます。最初は定められた語数をオーバーしたり足りなかったりしますが、あまり気にせず書いていきます。2度目に書く時には語数の帳尻が合うよう意識して書きます。こうした練習を繰り返しているうちに、下書きをせずに直接書いても定められた語数内で収まるようになりました。

私の場合は、どちらかという自分で考えた勉強法で突っ走ってしまおう傾向がありましたが、スランプに陥った時は先生のアドバイスを聞く

ようにしていました。自分に合った勉強法を確立しながら、それを改善していくことができたと思っています。グノでは勉強のやり方を押しつけられることはありませんでしたし、必要な時には的確なアドバイスがすぐに得られました。興味深い英文に毎週出会えることと毎回添削してもらえることが良いペースメーカーになって、うまく主体的な勉強を進められたと感謝しています。

語学学習で大事なポイント

英語でも中国語でも、言語を学ぶ時は、その言語を日本語を介さずに使えるようにすることが大事だと思います。文章を読んで内容を把握するだけなら日本語に訳しながらでもさほど問題はないのかもしれませんが、会話を通してコミュニケーションをとれるようにするためには、まして、その言葉で議論できるようになるためには、いちいち日本語に直していたら途中でわからなくなったり、タイムラグがでたりします。

そのためにはやはり音読が一番です。文章を目で追うだけではなく、口に出して発音して、その音を耳で聞く。内容をしっかり意識しながら声に出して読む基礎訓練が最も大事な習慣だと思います。



* 1 Active Learning of English for Science Students 通称アレス
* 2 Active Learning of English for Students of the Arts 通称アレサ

算数講師座談会

盛田一樹 × 伊藤琢真 × 三原孝志

わかる感覚、解く楽しさを知ることが「知の力」を育む。2013年の開校以来、中学受験グノーブルは難関中の合格者数を着実に伸ばしながら、さらに子どもたちの将来につながる指導を目指してきました。

中学受験生に向き合っている先生たちはどのような思いで日々取り組んでいるのか。本誌では国語科(16号)、社会科・理科科(18号)でその声を届けてきました。今回は算数科の先生方にお話をさせていただきます。



盛田一樹

伊藤琢真

三原孝志

勉強のモチベーションを維持するには、学びたいと思える授業を受けることが一番です。小学生は、本来勉強が好きなのでから。

「学歴」の相対的価値は下がっていくでしょう。その中で「中学受験」の価値はむしろ一層高まっていくはず。

低学年の授業ではその場で考え、面倒でもわざと全部を書き出すような作業を通して伸びる力を重視しています。

グノーブルの算数の指導 低学年では

伊藤：グノーブルでは、最難関中に合格できる学力を無理なく身につけられるように作成されたオリジナルのカリキュラムと教材が、1～6年生までそろっています。中学受験の学習が本格的に始まるのは新4年生の2月からなので、カリキュラムはそこから改めて初出の内容として学べるように組まれています。では、1～3年生の間にグノーブルの算数で何を学ぶかという、1つは4年生以降の学習につながることで有意義になるような内容、もう1つは、4年生以降の時間的な制約があることも含めてなかなか扱えないような算数的な内容があります。

三原：4年生以降につながる内容を1～3年生で学ぶというと、一見先取り学習のように聞こえてしまうかもしれませんが、これは1～3年生のうちから4・5年生の内容を学習していたら先々楽、というような考え方

とは異なります。

小学生の理解力、成長の度合いというのは一般的に年齢によってある程度は決まってきます。例えば論理的思考力というのは、家族や友達との日常会話や、普段の読書など様々な経験、また算数以外の教科学習を通して表現力や理解力を培う中で養われていく面があります。1～3年生で4・5年生の問題の解法テクニックを使って教える訳ではなく、その学年に適した方法で導いていくことが大切だと考えます。

一方で1～3年生の学習指導要領の内容は、塾で扱うには大分やさしいものです。そのため1・2年生のグノーブルの教材の中には学校の進度より若干先に進んでいる部分はあります。ただし問題を解く場合でも4・5年生で行うような解き方とはまた別の、その場で考え、面倒でもわざと全部を書き出すような作業をする力が必要な問題を多く取り入れています。こうした作業をする力は高学年になり、入試が近づいてくる中では養う

のがなかなか難しい力です。

伊藤：4年生以降のカリキュラムは入試までに間に合うよう、分野ごとに学習を組み立てていくのでどうしても駆け足で進まなくてはいけない部分があります。4年生以降ではなかなか入れにくい、しかしぜひ触れておきたい大切な題材を1～3年生までの間に多く取り入れるように作っています。

三原：身につけたい学力という点で言うと、低学年のうちに計算力はつけておきたいものです。算数が苦手な4・5年生の生徒の中には、考え方や立てた式は正しいけれど答えが間違ってしまうという場合があります。こうした計算ミスによる誤答を繰り返していると、本人のやる気、モチベーションが下がってしまいます。低学年のうちから様々な計算問題を解いて力をつけておくと、本格的に受験を意識したカリキュラムが始まった時スムーズに力を発揮できます。

盛田：先ほど話題に出た先取り学習に関してですが、ごく少数とはいえ中

には早いうちから高度なことを理解できる、好奇心の強いお子さんというのはいらっしゃるものです。そういったお子さんに枷をはめたくないとも考えています。この点については本人の自発性が第一です。すべてのお子さんに先取り学習が効果的だとは考えていません。グノーブルでは全体のカリキュラムとして先取りはしませんが、本来的には自ら学びたいお子さんの好奇心を満たすことは望ましいと考えています。

三原：グノーブルでは1回ごとの学習で基本的なことをしっかり習得しつつ、かなり深い内容まで学ぶことができるカリキュラムになっています。どこまで深く掘り進めるかは、その時の生徒の様子などによって変わりますが、常に深い内容までしっかりと学んでもらいたいと思っています。分野として先取りをしていくというよりは、1つ1つの基本をしっかりと学び、深いところまで理解を進めることで、どんなお子さんでも十分満足できるのではないかと思います。

志望校対策について

伊藤：6年生は5月のゴールデンウィーク特訓から志望校別の授業がスタートします。その後、8月のお盆期間の夏期学校別特訓、9月からは日曜日の志望校別特訓で本格的に志望校対策を行います。

盛田：志望校対策について全般的なことをお話しますと、基礎学力が身につけていなければ、志望校への対応力を磨いても効果は上がりません。どちらがより大事かといえば、基礎学力をきちんと身につけることのほうが大切です。確かな基礎学力の上に、志望校対策を積み上げることができれば入試では優位になるでしょう。

伊藤：そういう意味ではやはり一通りの分野をしっかりとできるように、志望校対策を行うべきだと思います。

盛田：基礎学力が完成する時期というのは生徒によって異なるので、算数が苦手なお子さんは9月の段階で志望校対策を始めるよりも、一般的な力

を鍛えることを続けたほうが近道な場合もあります。一方で春頃にすでに基礎学力が完成している場合であれば、その時期から志望校対策の学習をしても良いかと思います。過去問練習も夏前から取り組んで良い場合もあれば、9月でもまだ早く、10・11月から始めるのが適切な場合もあり、志望校対策の開始時期はケースバイケースの面が大きいです。

三原：学力が完成するイメージとしては太い幹となる土台の部分の学力を4・5年生、そしてできれば6年生の前半までで作っておいて、最後の枝葉の部分で志望校対策という形でつけていきます。実際の入試問題の切り口や設問形式に慣れるという意味で、9月以降の志望校対策やオープン模試で志望校の傾向に合ったものを演習することは、自信にもつながります。ただ、極論になりますが、志望校対策を行わなくても合格できる場合もあります。実際にはそう多くはないとはいえ、きちんとした実力が備わっていればどこでも対応できると思います。



昨今の入試問題の変化

伊藤：少し長いスパンでみると、入試問題は難しくなっていると思います。例えば、30年以上前のものと比べたら多くの中学校で問題の難易度は上がっています。ある学校が出題したものを塾が対策をする。翌年に別の問題を出してくる。それをまた塾が対策をするという、いたちごっこのようなところがあって、結果的に難化してきたと言えます。

実際の入試問題を多く見ていて思うことは、「この学校はこういう問題が出る」というようなこととは逆で、どの学校も様々な問題を出題してくるということです。

三原：20～30年くらい前であれば、学校での成績が良いお子さんが6年生の途中から中学受験の準備をして間に合うこともありました。ところが近年では、「中学受験の算数」を4年生ぐらいからしっかり学んでいかないと、なかなか追いつけない。これも言いかえれば入試問題のレベルが上がっているということでしょう。

盛田：一方で、入試問題を作る中学校の先生方の苦労も相当大変なのではないかと想像します。思考力を問う良問を作成しても、おそらく過去にどこかで似たような問題が出されている。昔に比べて受験情報が手に入りやすく共有されるようになったので、ひたすら過去問で鍛えた子が高得点を取ってしまう場合もあります。このような、6年生段階での習得スキルの

有無で入学を判断することが、中学校にとって良いことなのかどうかはわかりません。

また、その場で考えさせる問題を出そうとしても、学習指導要領の範囲内で作問するとなると、出せることがかなり限られてしまいます。これまですでに出し尽くされているところで、さらにまだ見たことのないようなオリジナル問題を作るというのはかなり難しいのではないのでしょうか。

伊藤：一時期、その場で考える力や調べ上げて答えまでたどり着く力を見る問題が増加傾向にありました。しかしここ最近は、そのかわりに処理力を問う問題、読解力や条件を読み取る力を測るという問題が増えてきた印象があります。その場で試行をしたり調べ上げたりする問題は、入試当日たまたまできたか、できなかったという面があり、選抜試験の問題としては減っているのではないかと思います。処理力や読解力を身につけ、きちんと読み取りさえすれば、問題自体は長くても難しくはない場合があることは意識していきたいですね。

学習や受験へのモチベーションを高めるために

三原：文化祭や説明会など、実際にその学校に行くことは大事です。普段からご家庭で中学受験のことを話題にしてもらうとモチベーションが維持しやすいですね。保護者の方が説明会に行かれたら、お子さんにその内容を伝える。「自分は中学受験をして〇〇中に行く」という雰囲気がある場合とそうでない場合では、学習に対する意欲が異なってきます。こうしたご家庭でのフォローはとても大切です。

家庭学習、宿題を保護者の方に手とり足とり見てほしいわけではありませんが、本人任せにしすぎて保護者の方はノータッチとなってしまうと、モチベーションの維持が難しい場合

があります。細かい点に注意するのではなく、「ちゃんとあなたのことを見ているよ」という姿勢を保護者の方が示すことは大きな意義があります。

また、塾と並行してスポーツや習い事、単に遊ぶことも大事だと思います。6年生になった時に勉強以外で養われた集中力が生きてくることも多いので、習い事なども続けてほしいと思います。

伊藤：保護者の方からのフォローはもちろん大切ですが、一方で家でもずっと受験の話をして、受験のことばかり考えているというのは、ある意味で気持ちがいいことではないと思います。塾は塾で良い意味で楽しんで、復習を済ませた後は他のことをやったりしてメリハリをつけるのが良いのではないのでしょうか。

グノーブルで一番大切なのは授業をしっかりと受けるということです。授業をしっかりと聞いてモチベーションを高くし、家で復習というメリハリをつけて学んでほしいですね。

盛田：本来、小学生は勉強好きです。問題が解ければ素直に喜びを感じますし、達成感を得ることでもっと勉強が楽しくなり、さらに学びたいと自然に思うようになります。

お子さんのモチベーションを高く維持するために一番大切なことは、そう思えるような授業をどんどん受けてもらうことだと思います。



伊藤：特に算数はできるから楽しい、という面が強い教科です。まれに間違いノートを作って、そればかりに取り組みご家庭が見受けられますが、できない問題ばかり解く時間というのは、お子さんにとって大変苦痛であり、逆に理解が進まなくなってしまいます。極端に言ってしまうと、ご家庭ではできる問題だけを解いて理解を深める、そういった側面を大切に日々学んでほしいですね。

中学受験の意義とは？

伊藤：中学受験を通して、4教科どの科目も小学校の学習だけではなくなかに到達できない高いレベルの学習を経験できます。また、たとえなかなか成果がでない時期があっても、頭を使って考え、問題を解決しようとする姿勢はその後の生活の中でも必ず役立つと思います。

盛田：中高6年間のより良い環境を選べるというメリットの他に、様々な学習・経験を通して自分の興味や将来について考えるきっかけが増えるという点も見逃せません。中高生になっても同じようなことは考えますが、より早い時期により広く考える機会を持つことができると思います。

三原：子どもたちにとって、中学受験をする中で体験し、身につけた考え方、あるいは考える姿勢そのものが、その後のお子さんのアイデンティティの形成に大きく影響すると思います。

伊藤：世の中が大きく変化する中で、肩書きとしての「学歴」の相対的価値は下がっていくでしょうし、生徒をレールに乗せて運んでいくだけの中学受験はむしろマイナスであると思います。

しかし、自分の頭を使って問題に挑んでいくことの大変さと、大変だからこそ得られる達成感、それが次への意欲と自信につながるような中学

受験の経験は、新しい時代に向けてその価値が大いに高まっていくと考えています。

算数はどのような科目か？

三原：単純な答えですが、算数はとても面白いものです。知的好奇心を満たしてくれますし、解けた時の達成感がとても得やすい科目です。こうしたことを子どもたちに伝えることが、私にとっての楽しみでもあります。

伊藤：理系・文系と言いますが、実は理科と算数というのは真逆な科目とも言えます。理科は先に事象があってそこに理屈を考えてつけていきますが、算数には理屈しかありません。事象がなくても話がどんどん進む学問です。極端に言えば、算数は何の知識もなくとも、考えて答えを導き出すことができます。

今、知識や情報は調べれば誰もが簡単にかつ平等に手に入れることができます。その上でそれをどうするかを考える力、組み合わせる力を利用する力を養うためにも算数は役に立つ科目なのかなと思います。

盛田：算数は「完成形」がある科目だと思います。わかってしまえば100点が取れます。例えば国語で満点を取るといったのは、なかなか難しいです。理科や社会も全部知っている、全部わかりきる、全事象を把握するというのは難しいでしょう。



一方、算数は小学生レベルの知識や経験でも全部わかれば、全問解けるのです。本人の理解力、捉え方によってどこまで考えられたとか、どれが解け、どれが解けなかったのかとわかりやすい面があります。そういうところが教えていて楽しいですね。

三原：中学生になって数学を始める時、算数とはまったく別のものが始まったんだという気持ちで臨んでしまうと、とっつきにくかったり、急にわからなくなったりします。グノーブルの場合、その部分をきちんとつなげて、算数ではこういうふうに表示していたものを数学ではこういう表記に変えられたりとか、同じことを別の側面から話しているんだというような、算数と数学を別物とは考えず導いていきます。グノーブルの算数で得た経験をぜひ数学でも活かして欲しいと考えています。



英会話グノキッズ

大きく変わる学校英語を踏まえた「英会話グノキッズ」の英語教育とは…

2020年度から学校英語が大きく変わるという話題を耳にしたことがあると思いますが、具体的にどう変わるのかまではわからないという方も多いのではないのでしょうか。文部科学省より発表された新学習指導要領の内容と照らし合わせながら、「英会話グノキッズ小学生クラスの英語」について情報をお届けしたいと思います。



小学校における英語教育の変化

大きな変化としては、今まで5・6年生で行われていた「外国語活動」が3・4年生より開始されること、また5・6年生では英語が「正式教科」になることが挙げられます。教科になるということは、他の科目と同じように評価対象になるので成績もつけられます。この新学習指導要領は2018年度に先行導入され、2020年度から全面実施される予定になっています。

2017年7月に発表された小学校学習指導要領解説によると、文部科学省は英語教育の主な課題について以下

の3項目を挙げています。小学校では、2011年度から高学年において外国語活動が導入され、その充実により、児童の高い学習意欲、ひいてはその後の教育課程である中学校の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている一方で、

- ①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない
- ②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある
- ③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる

これらを踏まえ『今回の改訂では、小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」、「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視すること』としています。

つまり文部科学省は、小学校中学年の「外国語活動」、高学年の「外国語」での学びがその後の中学校、高等学校における外国語学習にスムーズにつながることを目的としています。

インプットとアウトプットの大切さ

「話す」や「書く」などのアウトプットができるようになるには、膨大なインプットが必要です。見て聞いたものが蓄積され、蓄積が多ければ多いほど中学校以降の授業で文法的にも整理され、「話す」「書く」力はそこからぐんと伸びます。

グノキッズでは、授業ではもちろんのこと、子どもたちが家でもたくさんのインプットとアウトプットを楽しんでできるように、多くの工夫をしています。

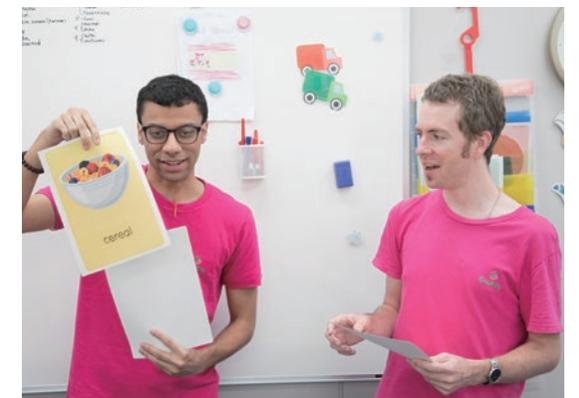
まず、グノキッズでは、体験型の授業、Project-Based Learning (以下PBL) を導入しています。PBLはアメリカでも高い評価を得ている英語教育メソッドで、子どもたちはプロジェクトに取り組みながら、工作や手遊びも交え、そのプロジェクトテーマに沿ったポキャプラリー、フレーズ、文法を学んでいきます。このメソッドの良いところは、インプットしたポキャプラリーやフレーズを、単なる暗記で終わらせず、自然なシチュエーションを想定しながら、目的をもって実際に会話したり、書いたりするなどのアウトプットができることです。英語は、暗記やコール&レスポンスに留まると、英語を学ぶ楽しさを見いだすことができず、モチベーションを維持することが難しくなります。英語は実際に使うことではじめて、英語によるコミュニケーションの楽しさを知り、子どもたちのモチベーションを保つことができるのです。

PBLの授業では、子どもたちが英語を学ぶことを嫌がらずに参加しているところを目の当たりにすることができ、講師陣もその効果を実感しています。最近の例を挙げると「日本国内の素敵な場所を紹介しよう」というテーマのプロジェクトを行いました。「日本国内の素敵な場所をプレゼンテーションする」ことを目標とし、まず、子どもたちが今まで行ったことのある場所やそこで楽しいアクティビティについて英語で紹介しました。

今まで学んだ規則的な変化をする一般動詞の過去形や、今回初めて学んだ不規則な変化をする動詞の過去形を使用しながら紹介するので、文法やフレーズを効果的に学習することができました。さらに、有名な観光スポットや名産、目的地にたどり着くにはどの乗り物でどのくらい時間がかかるかなど、タブレットを使い、子どもたち自身が英語で積極的に調べ、調べた結果をイラストと英語の文章でポスターにまとめていきました。このようにPBLでは、プロジェクトの目標達成に向けて英語を楽しく使っているうちに、いつの間にか学んでいるので、効果的にインプットとアウトプットができるのです。

グノキッズでは、クラス体制にも工夫をしています。90分の授業を2名のネイティブ講師がオールイングリッシュで行います。先生が2名いることで、子どもたちは講師間の自然な会話の掛け合いを見ており、英語のニュアンス、表情やボディランゲージなど、生きた英語を体感しています。これは2名体制ならではの体験で、それだけインプットも多く、リスニングの向上にもつながっています。

グノキッズオリジナルの宿題ビデオの教材にもこだわっており、授業に来られない日でも英語に触れることができるよう、宿題ビデオを配信しています。ビデオの内容は、宿題プリントのリスニングやポキャプラリーだけでなく、海外の文化を取り入れた楽しい英語の物語やパペットショーになっています。これらは音声の他に、話すたびに出演者の口からイラストのふき出しが出たり、画面下に英語字幕をつけるなど、耳で聞こえた単語を目でもインプットできるような細かな工夫が施されています。すべて聞き取れなくても物語を推測できるような仕掛けになっているので、低年齢の子どもから見るができます。(よろしければYouTubeにGnoKids Homework Videosが多数掲載されているのでご覧ください)



2020年度から大きく変わる小学校英語

現在の小学校
 小学5・6年で「外国語活動」
 ▶英語の音に慣れ、英語を使うことに親しむことがメイン

2020年度から…
 小学3・4年で「外国語活動」 小学5・6年で「教科の英語」
 ▶英語のスキルを育て、初歩的な文字の読み・書きに触れ学習評価の対象にもなる

	小学3・4年生	小学5・6年生	中学1～3年生
学校	外国語活動としての英語	教科としての英語	コミュニケーション能力の基礎としての英語
	・楽しみながら「聞く」「話す」の基礎を作る。 ・動作を交えながら、自分の考えや気持ちを伝えあう。	・基本的な文法に触れ、規則よりも表現に親しむようにする。 ・身の回りのことや自分のことなどを話し、簡単な文を書き写す。	・「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に活用し、文法をコミュニケーションを支えるものとして言語活動と一体的に学ぶ。
グノキッズ	年少～年長クラス	小学1～3年クラス 小学4～6年クラス	小学3～6年クラス

小学校英語教育の課題とグノキッズの取り組み

少し話を戻しますが、文部科学省が挙げた現行の小学校英語教育の課題について再度触れたいと思います。挙げられた課題は次の3項目です。

- ①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない
- ②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある
- ③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる

①の中学校の段階で音声から文字への学習にスムーズに接続されていない原因としては、子どもたちの学習意欲への課題もさることながら、絶対的な授業時間不足も考えられるのではないのでしょうか。子どもたちの学習スピードにはそれぞれ個人差があり、音声で学んだ英語を文字に関連付けようと一生懸命頭の中で変換している最中に、目の前では文法の授業が次々と展開されていくので、追いつけない子どもにとっては、この時間不足による授業進捗の速さが、英語を苦手だと感じさせる引き金になっていると言っても過言ではありません。

③についても、教師たちは体系的な学習を行うために、単に文法を説明するプリントを配布するだけに留まるわけにはいきませんので、その準備・実施のためには多くの時間を要すると思います。

グノキッズでは、先ほど紹介したように、1つのプロジェクトを8～10週間かけてゆっくりに行っていくので、ポキャブラリー、フレーズ、文法を反復しながら確実に学ぶこととなります。反復することで、きちんと音

と文字が定着し、体系的にも「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能をバランス良く、楽しく、効率的に学んでいくことができます。またオリジナルの家庭用学習テキストも、必ず以前学んだ問題を取り入れるように工夫しており、反復することを心がけています。PBLの学習メソッド自体が、毎回様々なテーマに沿ってたくさんのごを疑似体験できるようなマテリアルを用意し、子どもたちはプロジェクトの目標を達成する過程で英語を学んでいくので、とても効果的な学習をしていると言えます。時間をかけて体系的に学ぶことができるPBLは、①と③の課題にとっても有効的です。

②の音声と発音の課題についてですが、これは日本語を母語とした人が英語を学ぶ際、最初に感じる文化の違いです。日本語では、ひらがなを覚えると、その組み合わせからなる単語や文が読めるようになりますが、英語は26のアルファベットの「文字」と「名称」を覚えても、単語が読めるようになるとは限りません。なぜなら、英語のアルファベット26文字には、それぞれに「名称」だけでなく「文字」が示す「音」があるからです。この点が日本語とは大きく異なるので、私たち日本人が英語を学ぶ際に英語の発音と綴りがまず課題に挙がるのは当然と言えます。

そこでグノキッズでは、フォニックスという学習メソッドを取り入れています。フォニックスとは、英語の「音」を「文字」に結びつけるためのルールを覚えるメソッドです。

グノキッズではフォニックスをベビークラス(0歳児クラス)よりカリキュラムの中に組み込んでいます。最初の段階ではアルファベットの「読み方」だけでなく、

歌と動きをつけながら「音」も楽しく学んでいきます。(よろしければホームページにオリジナルABC動画が掲載されているのでご覧ください)これはベビーのクラスだけで完結せず、小学生のクラスまで繰り返し行います。繰り返し学ぶことで定着率を高めています。また、少しずつ複雑なフォニックス(マジックe*)なども紹介していき、ゲーム感覚で「音」を学びます。フォニックスをしっかり学習することで、これまで見たことのない単語でもすぐに読むことができ、聞いた単語をスペルできるようになるのです。子どもたちの成長にはいつも感動します。

グノキッズの目指す着地点

実際に英語でコミュニケーションができるようになるためには、先述したインプットも必要ですが、多くの成功体験が必要です。しかし小学校で行われる30名程度のクラス授業の中で、恥ずかしがらずにのびのびと話すことができる子どもは、どれほどいるのでしょうか。

グノキッズは少人数制なので、一人一人へのattentionが高く、ネイティブ講師も子どもたちがバランス良く発言できるよう目配りをしています。授業に集中できない子どもやクラスの中に埋もれてしまう子どもがいたら、彼らを率先して巻き込みながら発言を促すようにします。一方で、決して無理強いはいしません。なぜならアウトプットが始まるまでは十分なインプットが必要であり、子どもたちにはそれぞれのペースがあることも理解しているからです。外国人に英語で自分の考えや気持ちが伝わったという成功体験を積み重ねることは、子どもたちに自信をつけます。夏休み明けの子どもたちから「海外旅行に行った時に自分の英語が通じたよ!」などの報告を受けたときには、講師陣は嬉しい気持ちでいっぱいでした。

グノキッズでは、小学生クラスまでのカリキュラムの中で、中学3年分の英文法をしっかりと学べるようにレッスンプランが組まれており、レッスンで実際に使った文法をテキストで復習できるようにしています。新学習指導要領が謳っている小学校中学年のゴールがグノキッズでのカブスクラス(年少～年長クラス)、小学校高学年のゴールがドルフィンズ・イーグルスクラス(小学校1～3年生クラス・小学校4～6年生クラス)、中学校3年間のゴールがファルコンズクラス(小学校3～6年生クラス)に位置づけられ、小学生クラスまでの間にしっかりと土台を形成し、進学の際につまずくことがないよう、さらなる英語力が身につけられるように指導しています。(左上図参照)

このようにグノキッズでは、一歩先を行く英語教育を提供しています。

「外国に一番近い英会話教室」

文部科学省は小学校と中学校において、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を次のように述べています。

「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わり方に着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に依りて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」

グノキッズのモットーは「外国に一番近い英会話教室」です。ご紹介した学習メソッドの他にも、楽しく異文化に触れられるプロジェクト内容を考えたり、授業で使用する玩具や本も海外からの取り寄せ品であったり、教室に掲載するカラフルな英語のポスターなどもまさに海外の学校で学んでいるような雰囲気作りを大切にしています。日本人にとって母語ではない外国語「英語」の学びを通じて、異文化に触れ、子どもたちのものの見方や考え方がより豊かになってほしいと考えています。

子どもたちが将来自分たちの夢や目的を叶えようと思った時に、英語が、これからの時代を生き抜く手段の一つになるようにという想いは、グノキッズも、日本の英語教育も目指すところは同じように思います。今後もグノキッズは子どもたちにとって「外国に一番近い英会話教室」であるよう、一同本気で取り組んでいきます。

※参考

文部科学省 平成29年7月小学校学習指導要領解説外国語活動編
 文部科学省 平成29年7月小学校学習指導要領外国語活動編



*単語の綴りの最後についている発音しないeのことで、このeがつくと直前の母音の発音に変化が生じます。サイレントeとも言われます。

グノーブルの先生は「近い」

私たちはすぐに皆さん全員の名前を覚えます。

授業中には、黒板や教材ではなく、皆さんと向き合っています。

教材の用意も、授業の準備も、皆さんの顔を念頭に置きながら。

個別添削も毎回行い、一人ひとりの成長を応援していきます。

皆さんと互いに敬意を持てる関係、明るく活気ある環境を堅持します。

グノーブルで、頭をフルに使う楽しさを実感してください！



2017年 大学受験合格実績 11期生〈在籍612名〉

東大各科類 99名

理科Ⅰ類	37名
理科Ⅱ類	14名
理科Ⅲ類	3名
文科Ⅰ類	13名
文科Ⅱ類	17名
文科Ⅲ類	15名

京都・一橋・東工 47名

京都大	8名
一橋大	22名
東工大	17名
東外大	13名
※国公立大	計245名

東京大学

99名

国公立慶医

55名

慶應大

264名

早稲田大

248名

上智大

114名

医学部医学科 181名

東京医科歯科大(医)	6名
東北大(医)	1名
千葉大(医)	7名
筑波大(医)	2名
横浜市立大(医)	2名
※国公立大医	計44名
慶應大(医)	11名
東京慈恵医大(医)	21名
順天堂大(医)	19名
日本医大(医)	16名
昭和医大(医)	13名
※私立大医	計137名



2017年 中学受験合格実績 4期生〈在籍206名〉

最難関中
144名合格

開成中 14名 / 麻布中 6名 / 武蔵中 2名 / 駒場東邦中 7名 / 栄光学園中 6名
聖光学院中 9名 / 灘中 1名 / 筑波大附属駒場中 5名 / 桜蔭中 19名 / 女子学院中 4名
雙葉中 2名 / 豊島岡女子中 10名 / 渋谷幕張中 26名 / 慶應義塾(普4・中5・湘2) 11名
早稲田(早稲田6・早大学院1・早実2) 9名 / 渋谷渋谷中 13名 / その他難関中にも多数合格!



大学受験 **グノーブル**

個別指導 **グノリンク**

中学受験 **グノーブル**

英会話 **グノキッズ**

グノーブル総合案内

www.gnoble.com